

## 第7章

# ウフエ = ボワニの統治倫理に関する覚書

真 島 一 郎

わたしはこう言われました。「おまえはたしかに寛容だが、おまえの大叔母、ヤーンソの寛容さにはとうていかなわない。自分に会いにくる者ならば、おまえは受け入れる、それもじつに寛容に。ところがヤーンソは、自分から出向いて人々を招きいれた [...] われらに命じ、人々を連れて来させたのだ。どうだ。自分のところまでやって来れば人々を受け入れる、それがおまえだ」  
( Houphouët-Boigny [ 1994: 31-32 ] )

### はじめに

コートディヴォワール共和国は1960年の独立以来約20年間、輸出用作物 コーヒー・ココアの生産拡大によるめざましい経済発展と国政の安定から、アフリカ諸国でも異例の範型にあたる「イヴォワール型発展モデル」( *modèle ivoirien de développement* ) の話題とともに語られてきた。「象牙の奇跡」( *miracle ivoirien* ) を強力に牽引したフェリクス・ウフエ = ボワニ ( Félix Houphouët-Boigny 1905 ~ 1993年 ) の国家運営について、アフリカの他の事例とも響きあう一党独裁や専制の形容がたとえ添えられたとしても、個人支配者としての彼がたとえばボカサ ( Jean-Bédél Bokassa ) やアミン ( Idi Amin Dada ) , モブツ ( Mobutu Sese Seko ) などとは質を異にする卓越的な指導者としての評価を「西

側」自由主義圏内で勝ちえてきたことも、それゆえふしぎではない (Dozon [ 1997: 779 ] )。

だがその後、コーヒー・ココア国際価格の下落と1970年代後半の一時的な景気過熱による公的対外債務の累積、またドル高騰で加速した金融費用の膨張から、1980年代の同国経済は危機局面に転じた (原口 [ 1986 ] )。ウフエ = ボワニの死に続きコナン・ベディエ (Henri Konan Bédié) 新政権が発足する1990年代、国際社会がこの国にあてる評価は、もはやアフリカの経済発展の泰斗とは対極の、肥大した国家による構造調整プログラムの不正適用ないしは妨害、すなわちバッドガヴァナンスの典型とみなされるに到っていた (Losch [ 2000: 18-19 ] )。

イヴォワール政治研究の領野で過去に生じたいくつかの転回点が、数十年をまたぐ同国経済の浮沈におおむね呼応することは、なかば自明ながらも興味ぶかい。高度成長の1970年代を通じ、この国の経済構造に関する基本的な参照枠組として定着していたのは、国父礼賛型の数多の書物にまぎれて「象牙の奇跡」ならぬ「象牙の幻影」(mirage ivoirien) の不吉な予言により異様な光彩を放つアミンの擬似発展論であった (Amin [ 1967 ] )。その後、メダールらの論集『コートディヴォワールの国家とブルジョワジー』(Fauré & Médard éd. [ 1982 ] ) が刊行されたのは、危機局面に突入した同国が世銀による初の構造調整借款 (1981年11月) を受容した翌年のことであり、国家財政が完全な破綻状態に陥った1990年代 (原口 [ 1995 ] ) には、文字どおり『イヴォワール型モデルを問う』の表題を掲げた論集 (Contamin & Memel-Foté éd. [ 1997 ] ) が状況を追尾することになる。

なかでも、従属論の単一的な視線から解かれた地点で国家構造の再検討を企てた前者の論集がイヴォワール政治研究の新たな参照枠組の座をおそう1980年代とは、ドゾン (Jean-Pierre Dozon) らによるプランテーション経済史観の華々しい登場も含めて、佐藤が的確に指摘する同国政治研究の第1転換点、すなわちウフエ = ボワニ・システムとでもいうべき支配構造の再生産に機能不全が生じた結果、輸出用作物生産の上部構造 (= 生産関係) をめぐる

国家イデオロギーの特質を相対化する作業に研究者の目が開かれた時期と  
いってよからう（佐藤 [2000: 56], Dozon [1997: 780-781]）。

だとすれば、西暦2007年のタイミングでウフエ＝ボワニ個人支配の再考を  
図る本章の試みとは、同国で史上初の軍事クーデタが挙行された1999年末以  
後の思潮、いわばイヴォワール政治研究における第2の転回を承けたものと  
いえるかもしれない。具体的にそれは、資本（可変資本としての労働力もふく  
めた）の最大限の自由化というウフエ＝ボワニ期の国是を廃棄するかのよう  
なイヴォワリテ（Ivoirité）概念の唱導（1995年）をつうじ、新元首コナン・ベ  
ディエをとりまく政界最上層の権力闘争が1999年の軍事クーデタに、また  
2002年9月以後は国土を二分する内戦に転化していった、今日にいたる激動  
の十年を承けた思潮の転回である。

この間、おもに国外の研究者は、国父と後継者のあいだで一見露骨なまで  
に走った亀裂の連続面と不連続面を国家システムの分析から微細に測定する  
作業へ向かったのに対し、イヴォワール国内の出版物には、800ページを優に  
超すグラ・メル（Grah Mel）のウフエ＝ボワニ伝（Grah Mel [2003]）をはじめ、亡き国父  
へ注がれる回顧の波が1993年の死去直後にもまして訪れていた。同じグラ・  
メル（Grah Mel）の編んだ『ウフエ＝ボワニとの出会い』を綴る56人の証言集（Grah Mel  
éd. [2005]）が、ブレザンス・アフリケーヌ社による1980年代初頭の『ウフエ  
＝ボワニへのオマージュ』（SAC éd. [1982]）をどこか想わせる体裁をとるよ  
うに、そこには、不可逆な時の残忍さにまつわる、ある情緒的な反応がきわ  
だつた。なるほど、現大統領バボ（Laurent Gbagbo）の苦難の前半生をたどるブッ  
クレット付DVD（Duparc [2004]）を筆頭に、対立陣営の出版物も「独裁者の  
悪」を告発する別の回顧法をこの十年で大量に呈示してきた以上、現フェリ  
クス・ウフエ＝ボワニ財団研究員のグラ・メルをとりまく政治性もまた明白  
であろう。くわえて情緒的と形容するからとはいえ、国外の冷静な情勢分析  
に比したイヴォワール国内の記述水準の程を貶めるつもりも、私にはない。  
ここで私が目を向けるのは、むしろ情緒の方だからである。ウフエ＝ボワニ  
なる現象を体験してきた当事者たちの情緒、いや正確には、言説における政

治性の不在をつとめて装う部外者たちの冷静な「分析」と、自らの政治規範をないまぜとせずにはいられぬほど当事者が強烈にいただく情緒との落差を考えてみたいのである。

主体の合理的選択と、それゆえの道具主義的・機能的社會觀を方法論上の前提とした社会科学の論議のうちに、情緒の主題を導くことは容易でない(ロバーツ[1993])。あえていえば、それを語る手段を私が手にしたいのは、近年ようやく模索がはじまったパトスの主題、ブルデュー流の「界」(champ)にもまして漠とした、雰囲気のような何かである(Vidal[1991, 2002], Proteau[2002: 13-30])。古くは社会的沸騰(effervescence sociale)などとも形容されてきた都市部主導型の社會運動に奔出するパトスというより、ここでいう雰囲気とは、村落の日常的な社會倫理に埋めこまれた、いわば沸騰せざるパトスに近い。

ウフエ＝ボワニの個人支配について私がまず想起するのは、彼がいまだ健在だった1980年代末の村であり共和国である。私はそのころ村にいた。国内西部ダナネ(Danané)県ズアン＝ウニアン(Zouan-Hounien)郡のダン(Dan)族の村である。1989年9月にコーヒー・ココア生産者価格の歴史的な切下げが断行され、両大戦間期以来たびたび繰り返されてきた農民のココア不売戦争が国内の一部地域に生じつつある時期だった。私の身近でも、短波ラジオで偶然フランスの放送を受信した村人が、生産者価格設定の欺瞞を叫んでいた。コーヒー買付に村を訪れる外国人中間商人の、詐欺まがいの計量法に人々はどよめいていた。にもかかわらず村には、国家という存在の捉えどころのなさ、かつての「フランス人」と大差ないピア(bia:ダン語の「アビジャン」)の国政に対するやり場のない不信や反撥とともに、エリートをめざし都會の学校へ旅だつ村の子たちの延長で、「元は農民だった」国父への漠とした信頼の雰囲気が共存するよう感じられた。雰囲気とはしよせん主觀の鏡にすぎぬ以上じつに怪しく、それだけに「信頼の雰囲気」を統治イデオロギーの十全なる権力効果の産物と臆断することも容易ではあろう。ただ、生計を直撃する事態を前に、人々は国父自らが説いたという「落胆するなどイヴオ

ワール人ではない」(Découragement n'est pas ivoirien)や「平和とは言葉でなくふるまいである」(La paix n'est pas un mot, c'est un comportement)といったスローガンを、日々の言語生活で諧謔を込めず用いていた。私が週に一度、郵便物の送受に訪れるダナネ市街の食堂では、正午の放送開始時に国営テレビが厳粛な口調で国父の言葉、「この国の進歩は農業に立脚する」(Le progrès de ce pays repose sur l'agriculture)を発したのち、「やあ、希望の土地よ」(Salut, Ô Terre d'espérance)で始まる国歌ラビジャンーズ(L'Abidjanaise)の演奏が続く。勇壮な旋律とともに画面を次々と流れ去る静止画像の多くは、汗を流し農作業に励む国民の姿、そして工業化と都市化をとげた誇るべき大都市の姿だった。国父が献辞をたむける農業、それはまぎれもなく、未舗装道の40キロメートルをこえて私がくらす場所、村でなされている労働への呼び名だった。

本章の目的は、かつてコートディヴォワール共和国でウフエ＝ボワニの個人支配と重ねて表象されてきた国家統治の倫理と、被支配者にあたる住民側の倫理、とりわけ村落部の住民にみられる社会倫理とを繋ぎうる、方法上の条件をさぐる試みにある。ただし表題に掲げたごとく、以下の記述はコートディヴォワールという共和政体の空間で今後モラルの問題系を再考していくための助走作業、覚書程度の意味をもつにすぎない。序論にあたる第1節では、個人支配の主題に照らしたモラルの問題系の一般的意義を、人類学の視点から論ずる。第2節では、イヴォワール村落社会の倫理を「市民社会」のそれに接続した思考の例として、ドゾンらのプランテーション経済論に言及する。最終第3節では、民族も含めた国内中間諸集団に対するウフエ＝ボワニの政策指針を顧みたのち、西アフリカ村落社会における権力関係の伝統的規範として知られてきた先着原理が、現代国家の統治倫理といかなる接点をもちうるかを、ダナネ地方の事例から考えることにしたい。

## 第1節 個人支配とモラルの問題系

### 1. システムと伝承

バーグ報告書の受容から冷戦体制の終焉を経て「民主化」、民営化、紛争化の世界的ないしは局地的な波に吞まれていったアフリカ諸国危機の数十年を承け、1980年代初頭以後のアフリカ政治研究で他地域におとらず活潑な論議の場を形成したのは、国家 - 社会関係の再考作業であった（ex.川端 [2006]）。同じ思潮のもと、植民地「帝国」の過去や国民「国家」の今を新たな論点に容れつつ、政治学とは逆方向から視野を補完してきた1980年代以後の人類学にとり、おそらくこの作業は、最終的に中間集団の再考を促す。20世紀転換期のフランスで「社会」学と未分化のまま生誕した「民族」学、またその理論を独自に摂取して成ったイギリス「社会」人類学とは、産業資本の急成長にともなう社会権と社会政策の導入により、20世紀型社会（福祉）国家の基盤整備を自国植民地の拡張とあわせて模索しはじめた同時代西欧の国家理性と確実に連動する、文字どおり「民族」と「社会」の凝集性をさぐる中間集団の学を意味していた。その後、「未開の機械的連帯」の事例分析に専念するあまり、かかる自らの思想的出自を忘却していく人類学が20世紀最終四半期に到りようやく国家のモメントへ回帰したとしても、それは以上の回顧に沿えば、半ば必然的な展開だったといえなくもない（真島 [2006a]）。個人、社会、国家という異なる水準の歴史主体に「自律」と「活力」を等しく呼びかける市場原理の世界化を背景に、国民国家の相対的失墜と20世紀型社会介入レジームの限界が論者の間で1970年代以上に叫ばれ、歴史のワンサイクルが閉じつつある今であれば、百年の時を経て回帰した国家 - 社会問題が人類学にとり、当の社会介入体制とともに生誕した中間集団学としての自らの出自を今日の脈絡で再考 = 再認する契機になったとしても不自然ではない。

社会的なものをめぐる問題系の回帰に国家の境界から解かれた新たな夢を

載せるにせよ、逆に国家の退行と連動した規律権力の空洞化するわち社会の危機をみるにせよ、そこにはまた、資本の規律化や社会それ自体の「再組織化」をいずれ生誕まもない「知識人」が「大衆」に訴えていた産業資本の勃興期さながらに、モラルの問題系が回帰する。漢語では道德や倫理としか訳しがたいこの言葉は、フランス語の法概念でいう「法人」(personne morale)が別の脈絡では「道德的人格」の謂になるごとく、主体の同一性を支える想像力、ことに集合的主体の場合には、社会結合と凝集を基礎づける集団の同一性について当事者間で胚胎する想像力の運動を意味してきた。社会の場における結合と離散のダイナミズムは権力の運動そのものである以上、緊張をはらんだ個々の部分社会でたえず一時的な結果としてのみ顕現するモラルの内実は、政治社会全体を包括する権力との間でつねに両義的たらざるをえない。市場原理の無差別な侵入に抗する対立軸として「モラル・エコノミー」を想定する者であれ、いまや明確な中心も不在のまま胎動をつづける世界大の「帝国」および各国政府を透明な窓口にして住民に照射される新自由主義の「主体的倫理」を肯定的に説く者であれ、だからこそ論議の賭金はいずれもモラルとなる。同じモラルの意義を説くとはいえ、論者各自の政治規範がこのうちいずれの側にあるかを見定めるために情報の受け手が細心の注意を払いつつある今日の状況を、ここでいう両義性の一端を証す現象として想起しておくのもよいだろう。

アフリカの個人支配を再考する本書の企てにとり、モラルの問題系に着目することの特質であり利点ともなるのは、批判性を欠くがまま「イデオロギー」の言葉を多用する発想とは、それが一定の距離を置くところにある。国民という集合的主体(モラル・コミュニティ)の同一性をあらかじめ「幻想」と断ずる考察(Bayart [1996])からも、あるいは自らの政治規範が諒とする集合的主体に限り、その想像された同一性を「幻想」に代えて「戦略的本質主義」などと名ざす考察からも、それは応分の距離をおく。イデオロギーなる形容の無批判な使用には、「虚偽」意識の脱魔術化という、研究者ならではの緻密な「実証」にもとづく「事実」究明への道筋が、初発から前提されて



いるからである。モラルの問題系への接近とは、自然化された概念の史的構築過程を露呈させる所作こそが当面最も正当な学問の所作たることを認めつつも、同時にいうところの正当な所作とはそれ自体がすでに一定の規範と「正論」とを研究者に促している事実を相対化するための試みである。

コートディヴォワールの例でいえば、モラルの問題系を意識することとは、時にフランス新植民地主義の橋頭堡とも評されてきたウフェ＝ボワニ流個人支配の収奪構造を国外から一方的に「解明」する研究者と、この独裁を現に生きた同国の住民とが、おそらく内戦勃発後の現在ですら和解しあえぬ場所を考えることである。それはまた、コナン・ベディエ政権以後に露呈した「嘆かわしい」現象をめぐり、外部の研究者が一方的に投じた「クセノフォビー」や「民族浄化」の形容に、当のイヴォワール住民が抱いたかもしれぬ苛立ちの在処を想うことである。アフリカの外部からなされたこれらいずれの指摘についても、私は基本的に間違っているとは思わない。その指摘に同調するイヴォワール住民も少なからずいるに違いない。だが、一方における論理への同調と、他方における論理と経験の落差から生じた和解不可能性ないしは苛立ちの思いとが、次元を異にすることはいうまでもない。社会の場が帯びる両義性そのものを問うモラルの問題系に、もとより正義の論調、正論は通用しない。仮にそれが新たな規律権力たることをはるかにもくろむ「正論」であるのなら、むしろ後者は前者にとっての考察対象として位置づけておいた方がよい。

別のしかたで言いかえよう。アフリカにかぎらず他国の個人支配を部外者が論ずる際には、二様の対応が考えられる。対応しだいで個人支配の再考はかなりの難題となるはずだが、多くの場合、難題につながる途を研究者は選ばない。「政治的権限の個人への集中」という独裁の概念規定は、そのように映る事態の通俗的な表象にじつは深く依存しており、概念規定に内在するその不純な構成要素を分析の力であらためて除去すれば「一見個人支配にみえる事態」の構造解析がひとまず形をなすという一種自家撞着的な道筋が、いわば概念規定のうちに初めから用意されているからである。独裁や専制とは



いうが、第1に、政治的権限がいかに集中したところで、一個人による近代国民国家の支配など、一個人による国家体制の顛覆が想像しえないのと同様、とうてい不可能である。第2に、たった一人の個人が巨大な政治社会を支配しうる装置として、だからこそ民主主義の擬制に隠蔽された内閣、国民議会、官僚、与党組織、軍隊、国営企業等々が存在するとはいうが、いうところの装置があくまで現実の局面では支配者個人の政治生活を複雑にとりまく個別の社会諸関係として出来る以上、そこには単に個人支配という特殊テーマをこえた、主体概念一般をめぐる無批判の前提が紛れこんでいそうである。主体の境界を周囲から縁どる言葉が「大統領閣下」であれ「独裁者」であれ、そのつどの社会関係を通じて呼びかけられる主体に、啓蒙期流のとまではいわずとも少なくとも新古典派経済学流の強い方法論的個人による支配イメージを用意するのが通俗の表象の特質だとすれば、その表象に支えられた「個人支配」の概念規定を具体的な事例分析によって修正し批判することほど、先を見越せる作業はない。そのとき研究は、「一見個人支配にみえる事態」について、当事者（アフリカ対象国の住民）と部外者（自分以外の研究者やジャーナリスト）の双方がこれまで呪縛されてきた「個人支配」や「独裁」なる形容のイデオロギー性であり虚偽意識であるものの所在を、システム全体行政機構、法制度、派閥、部族紐帯、クライアントリズム、階級、土台（infrastructure）のいずれもがシステムの代替語となりうる の具体的な権力効果の掘下げによって中和し、その瑕疵を露呈＝脱魔術化させる方向にむかう。表象など政治学的思考のまともな対象たりえぬと断ずるかぎり、結論は明白である。「実証」的分析にもとづく個人支配表象の修正ないしは否認である。地域研究としては得がたい研究成果になりうるとしても、だがその種の考察の道筋に理論上の問題はないだろうか。

まず考えられるのは、個人の主体性をシステムの記述で中和して主体化＝従属化の局面を前景化するあまり、「個人支配者」や「独裁者」と名指されてきた政治主体が分析という名のゲームで単なる駒のひとつにまで無化され、そこに一種のアイヒマン問題（アーレント[1969]）が胚胎する危険である。イ

ヴォワリテ概念を国民の新たな同一性構築に備給しつつ国父の威厳を空しく相続しようとしたコナン・ベディエのふるまいには、なるほど、国外資本の自由化により輸出用作物の生産増進を図ってきたこの国固有の経済「構造」とその浮沈、また政敵排除工作の裏側で彼自身もそれに従属せざるをえなかったクライアンテリズムの資源再配分「システム」、くわえて同国における憲法条文（特に選挙関連条文）のきわめて曖昧な運用「慣習」などが後景を成していたことは否定しがたい。だが、そう記せば免罪にも近くなる「構造」や「システム」や「慣習」の列挙のみでは、1995年8月26日の施政方針演説以来、イヴォワリテをめぐる彼の発言が同国の社会にひき起こした深刻な政治責任の所在は、いかにも宙吊りとなるだろう<sup>(1)</sup>。

第2に、個人支配（にみえる事態）の権力効果を任意のシステムへ還元する発想には、問われるべきシステムにとり周縁的な位置しか占めえぬ空間が、分析者の意図によらず捨象される傾向がある。国土の大半が村落地域からなるアフリカ諸国、わけても中心から周辺にむかう遠心的な権力波及のモデルなど外部の視線が生んだ神話にすぎないとさえ評されてきたコートディヴォワール共和国の場合（Cohen [1973]）、政治エリートの政策指針だけでなく研究者の考察からも易々と捨象されてきたのは、村の空間だった。近隣諸国よりは都市部の人口比率が高いとはいえ、国民総人口の5割強がなおも村落部に居住すると推計されるこの国について、研究者が暗黙のうちにみちびく都市と村落、いや国家と村の断絶は、考察のプロセス自体にいかなる影響をもたらすのか。システムの内部を生きる人間の過半数を捨象する政治システム研究とは、はたしてそれをしも「システム」研究と呼びうるかという素朴な疑念は措くとしても<sup>(2)</sup>、少なくとも研究者の自己表象にしばしば見えかくれする都市との同一化（村落の切捨て）は、アフリカの個人支配をめぐる「学問的分析」に同じくしばしば見受けられる主体記述の問題性をこれまでたくみに覆いかくす効果を生んできたのかもしれない。

私がここで具体的に想起するのは、村落生活を通じて知りえた、人間の固有な有名と出来事の間をめぐると特徴的な語りの様式である。このことに私が気

づいたのは、ダン語話者による村落移住伝承群の録音資料を調査ノートに逐一転写し、その読解作業に専念している時期だった。当時の私をはなはだ困惑させたのは、ある行為の主体が集団移住を率いた伝承上の大祖先なのか、それとも彼が率いる集団全体なのかが容易には判然としないほど、ダン語の伝承世界では集団名がその代表にあたる個人の固有名へと、主語のレベルで変幻自在に置き換えられる点だった。感覚としてある程度慣れぬかぎり、過去のダナネ森林域で複数の血縁・地縁集団が展開したにちがいない錯綜した接触・交渉プロセスも、まるでごく一握りの偉大な祖先による合従と反目の群像劇であるかのごとく、伝承の聴き手には聞こえてしまう。そればかりではない。伝承では、空間的にも社会的にも間接のものにとどまる集団間の関係に語りの重心が移るとき、集団それ自体であるべき主語の位置を例によって指導者の固有名が占めたうえで、物語が初発に設定した空間配置といかに矛盾しようが頓着せず、二人の大祖先による交渉があたかも対面状況のもと、ダイレクトに進行したかのように語りの様式が急変する。慣れた聴き手ならば人称代名詞の変化、つまりそれまで三人称で叙述されてきた集団であり個人である主体が、唐突に二人称で語り手に呼びかけられる、その一瞬の幻惑感により変調を察知することになる。集合的主体の占めるべき主語の位置を個人の固有名で置き換え、そうして主語と化した個人にあてがう代名詞を次には三人称から二人称へ、すなわちプロット全体の俯瞰的な解説から具体的な対面状況の描写に相応しいしかたへと変換する、この二重の変換が相乗して伝承にもたらず最後の特質とは、特定の集団が経験した事件について、ひとたび語りだせばきりがなくなるその事件の構成要件ないしは無数の因果連鎖を「大祖先がじかに交わした対話」という単純明快なプロットへと大胆に還元し、同時に説明の簡素化を補って余りあるしかたで、対面状況をなす代表者相互のやりとりとそのつどの情緒の機微を想像力豊かに描きだす点にある。出来事の重層決定はこのとき語りの内部で封印されている以上、「でもこの頃の彼は、まだ十分な畑地を森に持っていなかったはずですよ」のようなしかたで、聴き手が伝承の語りを遮ってはならない。同様の語りの特質は、神話的な移

住伝承にかぎらず、村落の日々の風聞やゴシップにも頻繁に顔をのぞかせる。数名の個人をめぐる話題として聴いていたら、じつは深刻な経緯をふまえた村落間の紛争が語られていることに気づいたり、伝聞を鵜呑みにしてすでに面識があるとばかり思いこんでいた二人が、じつはそうでないことに気づくような経験を、私は村でたびたび味わった。

本書の主題とはおよそ無縁に見える村落生活の一端をここで紹介したのは、コートディヴォワール共和国の独立伝承とでも呼ぶうるジャンルの歴史語りがダナネ地方のダン語世界には存在し、独自の神話化をとげたウフエ＝ボワニをとりまく群像劇の描写として、伝承の同じ特質がそこで遺憾なく再現されるためである(表1-IとII)。個人支配の統治倫理が浸潤する共和国の空間で、仮にこうした住民側の語りが統治倫理の維持について一定の効果をもつとすれば、逆に個人支配者である国家元首が国民に対し、また自らに対してもいかなる呼びかけの声を発していたかが試みに問われてもよいだろう。表1-IIIは、アフリカ民主連合(Rassemblement démocratique africain: RDA)とフランス共産党(Parti communiste français: PCF)の連携関係の発端について、国父自らが死の数年前に明かした回顧譚の一節である。知られるように、ラミヌ＝ゲイを筆頭とするこの直接会合の機会が仮にあったとしても、問題の1945年フランス制憲議会代議員選挙をめぐり、ペタン支持派の残党排斥に努める当時の象牙海岸総督ラトリーユの仲介で共産主義研究会(Groupe d'études communistes: GEC)アビジャン支部とウフエ＝ボワニが急遽結んだ盟約関係を想起するかぎり(Suret-Canale [1994: 61-63], Chaffard [1965]), 当時のウフエ＝ボワニによるPCFへの接近がきわめて高度な政治判断にもとづく重層決定の所産だった点は否定しがたい。にもかかわらず、共和国独立という半世紀前の神話の内奥に迫りたい国父の子たちにとり、ラミヌ＝ゲイとの緊張をはらんだ直接対話の挿話は、シンプルな内容ながらもまことに魅力的な臨場感を帯びるかのようである。少なくともここには先の村落伝承の特質、すなわち中間集団の群像劇化を促す集合的主体の個人固有名への代置、プロット全体の対面状況への圧縮、重層決定の単一決定への還元という3つの構成要

表1 固有名・出来事・物語

かつて、PDCIに対立する者たちがいた。進歩党の者たちだ。独立派協商 (L'entente des indépendants) と呼ばれる者たちがいたのだ。象牙海岸植民地総督のフランス人でペス\*という男がいた。そのペスがウフエ=ボワニと対立していた。ペスは、植民地のすべての司令官に、ウフエを支持する者たちを押さえこむよう命じた。そこでダナネ司令官には、ジャン=ピエール・オタヴィが選ばれた。オタヴィは、ウェザン・クリバリとか、アマニ・デュリとか、ママドゥ・コナテとか、PDCI-RDAの代議士全員と対立していた。ペスは彼らを殺したかったのだから、彼らもまったく運がよかった。ヴィアカ・ブダだけは、ブアフレで殺されたけれども。ペス総督は、セクー・サノゴに何百万フランも金を渡して、RDAに対立させた。サノゴが代議員に選ばれた、1952年の選挙のことだ。

(1994年11月19日 PDCI-RDAズアン=ユニアン支部長 Kuemi Pascal)

\*「ペス総督」= 仏領象牙海岸植民地第24代総督ロラン・ペシュ (Laurent Pechoux)

ウフエは調査団を送ってきたのだ。ウフエは、「私はアフリカ人だ。私を良く思わないカントン長すべてに、私を見直してくれるよう伝えてほしい。私はカントン長を悪いようにするつもりはない」と言った。ところがダナネのカントン長らは、「おまえは銃も持っていなければ、何も分かっちゃいない。いったい白人に対して何ができるというのだ。おまえは自分を支援してくれと言うが、われらに何ができるというのだ」と言って、ウフエの申し出をはねつけた[...]ダナネのカントン長は、6人ともPDCIを支持しなかった。ウフエは言葉を尽くしたが、彼らは態度を変えなかった。ウフエは言った。「それならばしかたありませんね。適当な人物がいれば、あなた方の今の地位に、その人たちを就かせることにしましょう」。調査団を送っても態度を変えない彼らに、ウフエは怒ってしまったのだ。カントン長らは、「おまえのようなアフリカ人が、こんなに大きな国を治めることなどできやしない。われらは白人のもとにとどまるつもりだ。白人とは顔見知りだが、おまえのことなど知らない。おまえのようなバウレにわれわれが何かしてやれるとでもいうのか」と言った。[...]共和国独立後に]われわれはウフエに言った。「ウフエよ、おまえはわれわれに何も与えないと言った。むかしのカントン長ならば、村で品物を自由に手に入れることもできただろう。なのに今では、村でニワトリをよこせと言うと、300フランという返事がかえってくるしまつだ。われわ

れは何も手に入れられないではないか」。するとウフエは、「あなたの方後にカントン長を継ぐ者はいません。それまではあなた方も今のままでいられます。もし現状が不満ならば、カントン長を辞職されるがいい。どうぞもっと実入りのよい地位に移ってください。ただし、カントン長の月俸を増額するつもりはありません」と言ったのだ。

(1994年11月22日 共和国独立時のダナネ地区PDCI系有力者  
Gome Tia Michel)

1945年10月のことだ。私はマルセイユ行きの船に乗り、そこから列車でパリに向かった。アフリカ人選出議員がパリで落ちあうことになっていた。セネガルのラミヌ=ゲイとレオポルド・セダール・サンゴール、ギニアのヤシヌ・ジャロ、スーダンのフィリィ・ダボ・シソコ、ダオメーのアピティ、そして象牙海岸の私といった面々だ。会を主宰したのは、最年長のラミヌ=ゲイだった。彼は、私がゴレ島師範学校に通っていた時の数学の教授でね[...]ラミヌ=ゲイは、当時支配政党のひとつだったSFIOと院内協力を結ぶよう、われわれに勧めてきた。そこで私は発言を求めた。「長老よ、そのご提案は、私には現実的と思えません。本国会で権力を分有するのは誰でしょう。すなわちSFIOとMRPと共産党であります。[...]仮にご提案に従って、われわれがこぞってSFIOに加入すれば、われわれは他の政党と疎遠になることでしょう。少数派になるということです。われらは三政党それぞれに加入しておく必要があるのです」。私の発言に出席者全員が拍手で応じた。で、慌ただしくもさっそく政党登録をしようという話になって、われわれのうち一番多かったのはSFIOへの加入者で、残りはMRPに加入した。ところが共産党には、誰もいないんだ！ そうなると、なにぶん政党加入の振り分けを提案していたのはこの私だったわけでね...

( Houphouët-Boigny [1994: 99-101] )

素がすべて出揃っている。

こうした語りの特質は、仏語圏西アフリカの都市部でときに驚くべき速度で流通・拡散していく「街頭ラジオ」(Radio-trottoir)のそれをも想起させよう。政府公式報道の裏側をめぐる想像上の「非公式情報」として匿名の大衆が広めるこの都市風聞は、ダカールではラジオ・シカップ=バオバブ(Radio Sicap-Baobab)の通称をもつように、アビジャンでもかつての黒人居住区にちなんだラジオ=トレイシュヴィル(Radio-Treichville)の通称で知られてきた<sup>(3)</sup>。



これら風評のひとつの典型は、一般市民が立ち入れない大統領官邸のような密室を舞台とし、国家元首やごく少数の政府首脳、国軍将校等をキャストにした対面状況の裏取引または感情の葛藤劇が「事件の真相」としてシンプルに、だが臨場感をもって描かれるというものである<sup>(4)</sup>。なるほど、村落部における歴史叙述の特質をさしたる根拠もなくかように敷衍する試みには慎重であるべきだが、ここでの論議の眼目はじつのところその点にない。内陸村落部からのたえざる人口流入で成長をとげた巨大都市アビジャンには、国内各地の村で共有された上記のごとき伝承の特性が、仮に「西アフリカの語りの魂」として巷間の流言に今なお息づくとしよう。村の長老を想わせる話術の天才ウフエ＝ボワニもまた、この「語りの魂」を忘却の波にそそぐどころか、ラジオ＝トレイシュヴィルさながらの弁舌を国政運営の場で巧みに再専有化し、国の子たちへの呼びかけに終生効果的に活用したとしよう。さてここで問われるのは、私があえて本質主義の筆に倣いそう形容した「西アフリカの語りの魂」とは、真にその名に値するヴァナキュラーな特質をもつかどうかという点にある。率直に問おう。仮にこれらの事例が「西アフリカの語りの魂」として一括できるとすれば、アフリカの個人支配を外部から論ずる研究者の多くもまた、異文化に由来するはずの当の「語りの魂」をそれと知らず、だが以下のごとく、自らの「分析的」記述の内分で有していることにはならないだろうか。

## 2. 主体とモラル

くりかえせば個人支配の分析的批判とは、個人支配や独裁などと素朴に評されてきた国家元首の行為の主体性を、詳細な事実関係の分析から浮かびあがる統治システム全体の複雑な権力効果により中和しつつ再考に付す作業である。個人による支配行為を自明視した権力の単一決定観ないし主意主義的解釈に歯止めをかけ、現実の微細な政治過程に沿った重層決定の様態を主知主義的記述の内に回復する試みといってもよい。だから本来それは、事件の



重層決定を大祖先の直接対話に圧縮還元するダン族の歴史伝承または「西アフリカの語りの魂」の特質とは逆行する企てのはずである。さて、研究者が今や具体事例の分析に臨む際、相互に異質なプロセス群の交錯として重層決定の網をかけたシステムそれ自体は、文字どおり「システム」とでも記すかそれに代わる何らかの近似的な実詞を主語の位置に置かぬかぎり、妥当な記述手段をみいだせない。とりわけそれが国家行政機構や機構の上層を占める政治エリート間の権力構造をさす場合にしばしばみられるのは「ウフエ＝ボワニ体制」や「ウフエ＝ボワニ政権」のような、体制や政権という捉えどころのない実詞の使用である。「システム」の類義語であるべきこれらの実詞は、だが典型的には国際プレス記事で容易に生ずるごとく、実詞の直前に置かれた国家元首の固有名と自在に互換可能であるかのような、一種の横滑り現象を来す傾向がある。「ミッテランはこの時期 域内関税自由化の見直しを図った」のように、とりたてて専制政治や独裁の風評をもたない個人についても頻繁に生ずるこの固有名とレジームの混同現象は、何を意味するのか。トラブルの原因は、単に言語表現上の制約にすぎないのか。

固有名とレジームの混同は、おそらく主体概念をめぐる、学それ自体の基本前提に起因する。政治学ばかりでない。人類学であれ、社会科学すなわち「社会の学」を志向するいかなる分野であれ、ひとが政治なるものを語るまた語ることで実践する 際には何らかの主体を指定せざるをえず、しかもこのとき異なる水準で指定された政治諸主体が、個別の水準をまたいだ潜在的な相互連鎖の関係を有する点に、この混同現象の遠因がある。

政治システムの分析には、通例さまざまな行為主体の名が飛び交う。アフリカの紛争研究のように、政治変動の真の「主体」(アクター)とはこの場合誰だったのかという問い自体が、論議の中核を占めることさえある。ただ、国連やAUのような超域的主体をのぞけば、そのさい言及対象となる多様な政治主体も、個人、社会(中間集団)、国家という3水準のいずれかに分類できるだろう。アメリカ政治学に根強いプルーラリズムの伝統にかぎらず、このうち中間集団として研究者に最もなじみ深いのは、共通の職業、宗教、社会

条件等にもとづく各種の利益集団、圧力団体や政治結社であり、それらはおおむね団体法の適用範囲内にあるフォーマルな団体といえる。他方、アフリカまたは旧第三世界の政治研究に特有の主題＝主体とされながら、その分析的価値（記述上の主語としての価値）がある時点から疑義に付されてきた主体に「民族」がある。《nation》でなく《ethnie》の訳語であるかぎり中間集団のひとつであることは確かであれ、主体としての民族は、旧来のコミュニティ概念を修正した非動員型のインフォーマル・ネットワークと、そのネットワークを元手に動員・結成されたフォーマルな民族系アソシエーションとを従来漠然と共示してきた。民族を主語の位置におき実詞として語ることの危うさが人類学にかぎらず政治学でも指摘されてきたのは、同一の概念によるこれら二様態の混同が、一方では分析に現実との齟齬や曖昧さをもたらし、他方ではいかに学問の記述とはいえアフリカ諸国の現状に何らかの政治性を導いてしまう点にあった。民族が実体的な組織論から情報論の主題へと今日移行しつつあるのもその意味では当然の展開であり、主体概念の再考を図る社会科学全般の思潮が中間集団からさらに個人のレベルへと移行する際に、個人支配の再考という本書の問題提起が生じたとしても、それゆえひとは唐突な印象を抱くまい。

ただし、個人支配の再考が対応しだいでかなりの難題となる理由もまた、この点にある。国家－社会問題への回帰が一方で生じつつあるとはいえ、これまでの政治学で記述上の基本枠組を供してきた筆頭の主体とは、いうまでもなく国家である。従来の政策諸科学で前提とされてきたこの「方法的ナショナリズム」（伊豫谷〔2003: 24-25〕）は、主体の同一性を自然化する言説機制としてみるかぎり、イヴォワリテ概念をもとに連帯と排除からなる新たな国民主体の形成を図った「異文化の彼ら」による政治的スローガンと変わるところがない。整合的主体としての民族を主語の位置からいかに放逐しようが、方法的ナショナリズムの自覚を欠くかぎり、考察は依然として何からも解かれていない。個人が不在の暗黒大陸ゆえに集合的主体「部族」を発案した帝国主義の想像力さながら、旧第三世界をめぐる西洋側の報道や論説が

もっぱら関心を向けてきたのも、方法上の優先権とともに同一性を確保された集合的主体「国家」と「民族」であった。「個人」の不在を画する言説がかくしてなおも反復をとげるのは、旧第三世界を眺める外部の視線に特有の現象、つまり国家や民族の同一性と個人の同一性とを何らの留保もなく繋げてみせる「記号論的な透明性」(周蕾[1999: 130])があるからだという文化批評理論の指摘を援用するなら、その透明性にまぎれて国家と個人をひそかに繋ぐ水路がつかのま逆流し、アフリカの「個人」支配という主題のもと、固有名とレジームの混同現象が生ずるのもまさにこのときである<sup>(5)</sup>。モラル・コミュニティと「記号論的に透明」に繋がれた伝承上の大祖先または国家元首をめぐる、この固有名とレジームの混同。

もとより国家、中間集団、個人とは、18世紀末以後の西欧であるものは顕揚されまたあるものは否認されることで、けっきょくは連鎖的に生誕した三様の歴史主体である(真島[2006a])。ましてや、ウフエ＝ボワニという現象の生じた場所が、そのわずか半世紀前には植民地「帝国」の同一性を賭けて植民地首長(「個人」と部族(「中間集団」)とが同時に創出された土地でもあるからには(真島[1999])、同じ近代の国家概念を半ば自明の前提としたうえで独立期以後の西アフリカ政治を論ずる研究者にとり、政治主体の同一性をめぐるこの表象連鎖の側面にはなおさら看過しがたいところがある。先ほど私は、ダン族の伝承にみられる語りの特質が、個人支配とされる国家の統治倫理に何らかの積極的な効果を帯びる可能性をひとまず仮定した。しかし「個人」支配の再考にあたっては、考察対象の言説よりむしろ考察者自身の言説において、一定の史的荷重をおびた主体連鎖の問題性がいっそう明白に露呈するといった方が正確である。同じく私は以前、イヴォワリテ以後のコートディヴォワールの政情不安について、「真の国民とは誰か」を問うふるまいには、パンドラの匣を開けるにも等しい危険がともなうと評したことがある(真島[2000b])。だが、その後内戦という最悪の事態に到った同国の政治過程をウフエ＝ボワニの支配形式にまで遡行して検討するとき、個人支配の再考という難題を前に、学の存立基盤に直結したパンドラの匣を開けざるをえな

い状況に自らを追い込むことになるのは、イヴォワール人というよりむしろ研究者の方ではないだろうか。

いずれにしろ個人支配の再考は、主体概念そのものに触れる基底的な次元で、国家の同一性の再考を研究者に要請する。システムの精査により支配者「個人」の中和をいかに図ろうとも、パンドラの匣から現れるのは依然として固有名とレジームの混同に守られた主体「個人」の姿であるだろう。なるほど、一連のモダニティ批判を経てきたいま、かつての整合的主体、揺るぎない行為主体の姿は、もはや描かれることがない。伝統的な首長継承者であり、アフリカ人医師であり、プランターであり、サンディカリストであり、フランスの閣僚でありといった相互に異質な要素群の堆積から「すぐれてバロックな人物」(Dozon [2003: 334-335])とも評されてきたウフエ＝ボワニの例によるまでもなく、21世紀初頭の「個人」は複数性の符牒で語られるのがつねである。ただ、ここから生ずるひとつの逆説とは、複数性、脱中心性、断片性といった形容が今また新たなしかたにおける同一性を主体に保証するかぎり、かつてと大差ない主体構築＝伝記執筆の作業、具体的には集合的主体「国家」の無意識の再認とその伝記(ナショナル・ヒストリー)作成を連鎖的にないまぜとした「ウフエ＝ボワニ体制」の再考作業がなおも継続するばかりだという点である。本書の問題提起が難題と化す最大の理由は、ここにある。

問題の所在は、かくして個人支配の再考を図るうえでの二様の対応という冒頭の論点に、ここでようやく送り返されてくる。個人支配という表象の曖昧さをシステムの精査により修正するという第1の対応を、私は以上の記述から否定していることにはならない。政治の記述から主体を抹消するなど原理的に不可能であり、私の試みた批判もそれゆえこそその批判であった。個人支配や独裁の一言でアフリカ諸国の政治過程を矮小化する表象の暴力に対峙するうえで、システムの重層決定を事実関係の精査から証しだてる研究者の探求は、有害であるどころか何物にも代えがたいまでに貴重である。しかしだからこそ、そうしたリアリズム＝「実」証主義の文体の陰で、政治主体の

同一性は研究者によってもまた、各自の政治規範にもとづき確実に想像されているという現実を可視化するための手段が、個人支配再考というテーマには求められている。

システムへの配慮をあくまで第1の要件とみなしたうえで考えられる第2の対応とは、たとえ外部の研究者であれその枠内では必ずしも外部たりえなくなるモラルの問題系、つまりは主体の同一性をめぐる想像力そのものを再考する作業となるだろう。この問題系のもとでは、対象社会にみられる特定のモラルのみを研究者が「イデオロギー」と呼んで自らのそれと裁断することは不可能である<sup>(6)</sup>。国民というモラル・コミュニティ（または「正しい民主主義」）をめぐる研究者側のユニラテラルな規範からひとたび離れれば、新植民地主義の世界システムを糊塗する「老賢者の対話と平和」を現に生き、民族浄化の流血に手を染めてまで「イヴォワリテによる国民統合の悲願成就」を想像した人々の、その経験と想像力までも「民主化のパフォーマンス」にもとづき算定しあるいは否認する資格は、記述の中立性を装う研究者に約束されない。研究者は他者の査定者になりえない。

モラルの問題系が研究者に促すのは、システム（一見個人支配にみえる統治倫理の社会経済史的な構成過程）への配慮を尊重しつつも、すでに構成された倫理の内容をそのまま受容してみる試みである。たとえばそれは、先述のコートディヴォワール従属論を通じてアミンが可視化した国際的な負の経済構造が、ウフェ＝ボワ二個人支配の再考には不可欠な了解事項である点を認めつつも、「偉大なる国父」の同一性を支えるイヴォワール住民の想像力を、あえてそのまま受けとめる試みをさす。社会主義に彩られた政治規範という点では究極の外部ともいえる立論を学史上の古典として批判的に継承したうえで、かつ「国父の偉大さ」をイデオロギーの名で切り捨てず、国父を讃える声に極力耳を傾けること<sup>(7)</sup>。ただし、システムへの配慮にあたる前半の作業通過点を強調しておかぬかぎり、個人支配のモラルをあえてそのまま受容する姿勢は、研究者による統治倫理の無批判な再生産と混同されかねない。次節で私が試みるプランテーション経済史観の検討は、本章にとっての、その必要

不可欠な作業通過点に相当する。

## 第2節 プランテーション経済論

新時代の人類学の言挙げとして、「進行途次の近代国民国家は、民族(ethnie)と同等に人類学の正当な考察対象となる」(Chauveau & Dozon [1985: 63])点を証したショヴォーとドゾンによる一連の研究は、それが1980年前後という比較的早い時期の現象だった点で、国家 - 社会問題に対する人類学の本格的な戦列復帰(真島[2006a])に先鞭をつける格好となった。くわえて、ロング・デュレの視点から浮かびあがる「イヴォワール市民社会」の史的生成を輸出作物生産の全発展過程と関連づけ、最終的に国民国家の同一性そのものを再検討するというその斬新な試みは、同国政治史に関する従来の理解を一新してしまった。個別の指摘にいかなる評価を下すにせよ、彼らの立論をふまえぬイヴォワール現代史研究は現時点でほぼ想定しがたく、とりわけ同国の歴史に向きあう際の分析装置(analyseur)であり、モース流の全体的社会事実(fait social total)を構成するとさえ彼らのいう「プランテーション経済」(économie de plantation)の概念は、この新たな史観を要約するうえで最大のキーワードとなった。

人類学の以後の変貌を予告するかたちで彼らの立論にみいだせる第1の基調は、アフリカ人を研究対象としてでなく歴史主体とみなす視線の回復、具体的には国民国家の同一性を自律的に構築した主体を歴史の内にあらためて探らうとする系譜学的視線(regard généalogique)である(Chauveau & Dozon [1988: 733])。むろん主体の同一性をめぐる問いは、彼らにあって個人支配の問題系と繋がらずにはいない。ガーナを除けばアフリカでも例のないコーヒー・ココア経済を発展させてきたこの国を眺める外部の視線には、従来奇妙にも主体の姿が映されてこなかった。発展を肯定的にみる者はしばしばウフェ＝ボワニ個人の政治手腕にその功績を帰し、否定的にみる者はマクロな



従属論の構図で事態を説明する。このとき双方の視線から脱落するのは、個人支配型の国家といえども本来国家とはその受託者 (dépositaire) にすぎない、社会の自律的な諸力の存在である。ひとたびイヴォワール社会の側から国家史を顧みれば、共和国の独立はけっして与えられた (octroyé) ものでも、ウフェ＝ボワニの自由意志が志向した共犯関係の所産でもない。同じくプランテーション経済の展開は、ウフェ＝ボワニ個人の「作品」でも、植民地開発政策の遺産でもない。逆にこれらすべては、イヴォワール社会が独自かつ自律的に選択した結果もたらされた現実である点を彼らは強調する (Chauveau & Dozon [ 1985: 69, 1988: 732-734, 745 ], Chauveau [ 2000: 118, 119 n.43 ]).

農村を生産・流通の起点とするプランテーション経済に注目すれば、イヴォワール現代史における村と都市、民族と国家、さらには経済と政治を繋ぐ特権的な視座が得られるだろう。くわえてプランテーション経済の展開がイヴォワール社会そのものの形成プロセスと仮に重なりあうとすれば、国民国家の同一性を構築した主体の姿をさぐるうえで、研究者は包括的な視座を得ることになる。おなじ経済システムの内部で村落と都市の住民が同等の重みで扱われ、「市民社会」の形成過程に村落地域の動向が確実に視野へ収められた点は、現代アフリカ社会の考察から村の存在を不当に除外してきた数多の考察と彼らの立論とを分かち、第2の特色である。その背景には、ことさら都市だけがアフリカの近代の生成場ではなかった以上、近代と伝統の二元論で国民国家の空間を無意味に分断せず、村と都市を相互に繋ぎとめる「社会」形成過程へのアプローチこそが重要とみなす、ドゾンらの確信がひそんでいた。したがってたとえば彼らは、イヴォワール社会に出現した同じ中間集団として、一方の民族を、他方の利益集団、職業団体、政治結社等と過剰に区別せず、形成途上の市民社会にプランテーション経済の運動原理が等しくもたらした副産物として双方を捉えようとする (Chauveau & Dozon [ 1985: 63, 68 ], cf. 真島 [ 2006a: 37-39 ]).

第3にドゾンらは、プランテーション経済の発展過程を、土地所有と労働力移動という二大因子の変遷をもとに描きだした。両因子の相関からなる「地

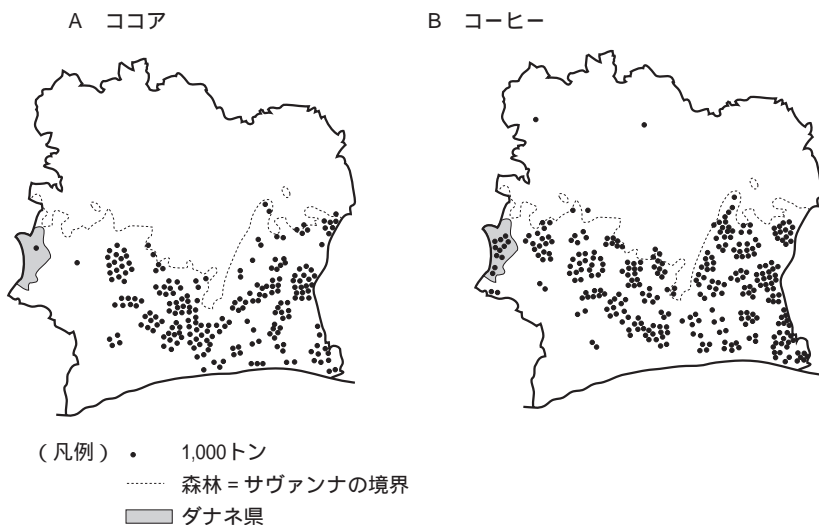


元民」( autochtones ), 「移入民」( allogènes ), 「移住民」( allochtones ) の3類型に沿った史的動態を, 一方では市民社会の発生論へ, 他方では村落社会の倫理学とも呼ぶうる主題へと, 彼らは同時に繋げようとした。アメリカ合州国史をモデルにした国内移入民の農業開発( colonisation agricole )( Chauveau & Dozon [ 1985: 67 ] ) または国内フロンティア ( frontière interne ) の漸進プロセスとしてプランテーション経済の展開を把握することで, 前者の理論拡張としては輸出用作物の生産地・非生産地双方を巻き込んだ「イヴォワール市民社会」形成史の視野がひらけ, 後者の理論拡張としては, 土地と労働力の使用権に依拠した村落社会の権力関係がけっして伝統の枠に封印しえないロング・デュレの産物だった点が明らかにされる。後述するごとくさらにそこからは, 状況への鋭敏な適応性と流動性を自らの原動力としてきたプランテーション経済そのものの権化として, バウレ移入民の姿が描き出される。土地所有と労働力移動の史的変遷といい, バウレ出身の個人支配者ウフエ＝ボワニとイヴォワール社会との連関といい, これらの主題をじかに論議の対象としてきたドゾンらの考察は, ウフエ＝ボワニ死去後の同国で露呈した政治的争点の大半を先取りしていた観すらある。本節以下では, イヴォワール・プランテーション経済論の理解に必要な地理・民族上の基本的背景にふれた後, 3期の時代区分に沿って彼らの立論を概観することにしよう<sup>(8)</sup>。

## 1. 基本的背景

コートディヴォワールの植生は, おおむね国土の南半分が熱帯林, 北半分がサヴァンナである。その例外として後者が前者をV字型に浸食する国土中央部は, バウレ ( Baulé ) 居住域とほぼ重なるため「バウレV」の通称で知られてきた。このうちコーヒー・ココア産地は, むろん国土南半に集中する( 図1-A, B )。ドゾンらのいう「プランテーション」( plantation ) とは, 経営規模の大小によらずこれらコーヒー・ココア栽培農地全般をさす術語である。同じく「プランター」( planteur ) も, 食糧作物生産との対比における「輸出

図1 コートディヴォワールのコーヒー・ココア産地



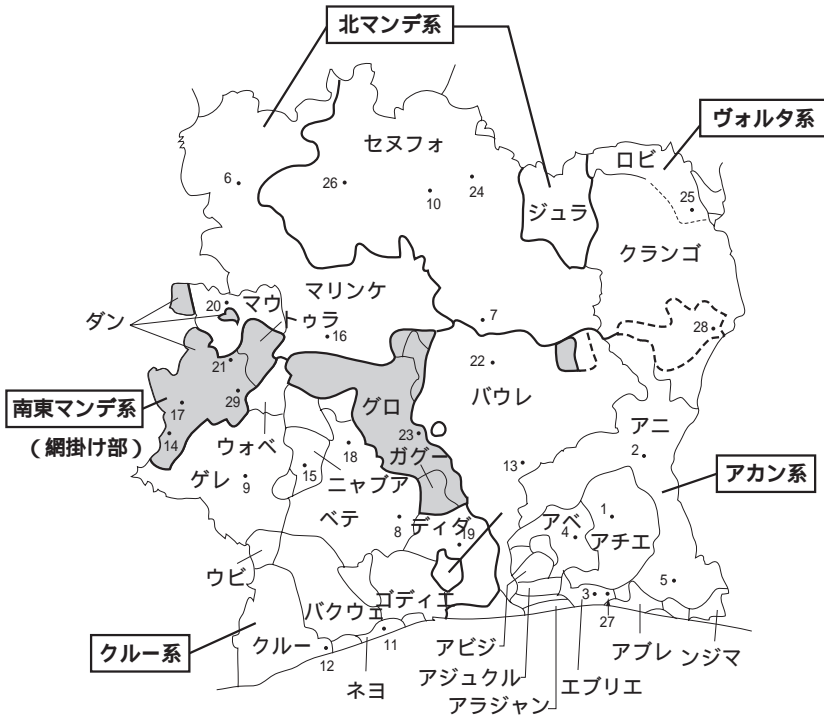
(出所) Vennetier et al. [ 1983 : 39 ]

用作物の生産農民」の総称として用いられる<sup>(9)</sup>。

国内のアフリカ諸語には、北マンデ (Mandé) 系、南東マンデ系<sup>(10)</sup>、ヴォルタ系 (Voltaïque)、アカン系 (Akan)、クルー系 (Kru) の、5つの言語系統がみられる (図2)。ただし国境の外まで視野を広げれば、アカン系のガーナ、ヴォルタ系のブルキナファソ、北マンデ系 (マンデカン諸語) のマリとギニア、クルー系のリベリアのように、南東マンデを除くすべてが、隣接諸国で優勢な話者人口を擁する言語系統である事実が知れる。それゆえ、国境線を前提としてこの国には5大語族があると語るより、むしろ国境の周囲で優勢な言語系統が四方からイヴォワール国境線を侵犯し、各々の舌の先端を国内中央部付近で絡ませているという喩をひくほうが正確である。

フランス領象牙海岸植民地は1893年に創設され、領内の軍事「平定」は1915年にほぼ完了した。その間、現地住民はドラフォスの言語学調査 (Delafoesse [1904]) にもとづき、5大語族をさらに細分化した約60の「種族」(race) や

図2 コートディヴォワールの語族と民族



- (凡例) **クルー系** 語族 境界を——で表示 \*南東マンデ系のみ飛地があるため  
網掛けで表示  
エブリエ 民族 境界を——で表示  
・ 主要都市

(出所) Vennetier et al. [1983 : 27] に引用者が一部加筆。

(注) 主要都市の番号は下記の都市名を示す。

- |           |              |             |              |
|-----------|--------------|-------------|--------------|
| 1. アゾベ    | 2. アバングル     | 3. アビジャン    | 4. アボヴィル     |
| 5. アボワソ   | 6. オジェネ      | 7. カチオラ     | 8. ガニョア      |
| 9. ギグロ    | 10. コロゴ      | 11. ササンドラ   | 12. サンベドロ    |
| 13. ジンボクロ | 14. ズアン＝ウニアン | 15. ズクブ     | 16. セグラ      |
| 17. ダナネ   | 18. ダロア      | 19. ディヴォ    | 20. トウバ      |
| 21. ビアンクマ | 22. ブアケ      | 23. ビアフレ    | 24. フェルケセドゥグ |
| 25. ブナ    | 26. プンジャリ    | 27. ベンジャヴィル | 28. ボンドゥク    |
| 29. マン    |              |             |              |

「部族」(tribu)に分類された。資本投下の前段階としてエスニック化されたこれらアフリカ人労働力には、以後の植民地経営を通じ、主に輸出用作物生産の貢献度にもとづく差別的な表象が与えられた(真島[1999])。今日の内戦にまではるかに影を落とす「東」(=国土の南東部)、「西」(=国土の南西部)、「北」(=国土の北半分)の地域表象である。このうちドゾンらは、国土中央を縦走するバンドマ(Bandama)川を東西の文化境界とみなす植民地期の想像力の内実を、早くから批判的に論じていた(Chauveau et al. [1981])。

彼らのプランテーション経済論で主として言及される民族は、「東の地元民」アニ(Agni:アカン系)、「西の地元民」ベテ(Bété:クルー系)、「北出身の移入民」マリンケ(Malinké:北マンデ系)およびセヌフォ(Sénoufo:ヴォルタ系)、そしてこれらすべての狭間に位置するパウレ(アカン系)である。パウレ居住域がココア・コーヒー栽培には不適なサヴァンナに位置しながら、脱植民地化以降に「パウレ人」と「プランター」が表象として折り重なっていく経緯、また異なる語族系統の舌がちょうど絡みあう国土中央部がたまたまパウレ居住域だったことの国内地政学(cf. Chappell[1989: 675-676])とでもいべき意味が、以下の歴史解釈では論議のポイントとして續かれることになる。

## 2. 稼働前夜 1890～1910年代

植民地創設令の発布から軍事平定作戦の完了にいたるこの時期は、プランテーション経済の稼働前夜にあたる。ただし植民地開発の方途をさぐるフランス側には、現地労働力の開発適応度に準じて表象された領内地域間の階層化が、すでに現実の政策へと影を落としはじめていた。フランスにとり、領内南部の森林域は農業開発の豊かな可能性をひめる一方、軍事平定期に住民側の激しい武装抵抗を経験したこともあり、森林の住民は「御しがたく野蛮」である点が懸案となっていた。ただし同じ森林域でも「西」に比べ「東」のアカン系住民とりわけアニ人は、ココア開発の前段階にあたる天然ゴム開発

で一定の適応度を示していた。そこで以後の植民地開発は「東」の重点化に傾斜した。対する「西」は、賦役労働力の単なる供給地とされ、「御しがたい」地元住民に代わりフランス人自身による現地入植の可能性が模索された。

農業開発にともなう第2の懸案は、軍事平定以前の沿岸保護交易時代にフランスが築いた販路を新たに内陸で中継しうる人材を、アフリカ住民の内に見いだすことだった。その点フランスにとり、領内北部のサヴァンナは南の森林域とちょうど逆に、農業開発に向かない自然環境である一方、比較的文明度の高い商業民として知られる北マンデス住民の祖地として映じていた。そのため保護交易期の「東」沿岸で販路中継者の役割をはたしたンジマ(Nzima)族商人に代え、ジュラ(Dioula)の他称で知られる領内北部のマリンケ商人を「文明進歩の経済請負人」(agent économique du progrès)として「東」へ大量移住させる計画が浮上した。「森の蛮人」との対照から「御しやすく勤勉なスーダン農民」と想像されたセヌフォ人の南方移住が企てられたのもこの時期のことである。くわえて「東」沿岸に拠点を置く植民地総督府は、軍事平定期に「セネガル狙撃兵」として領内を従軍したセネガルやダオメ(現ベナン)出身のアフリカ人を、植民地行政の現地補佐職として積極的に登用した。それゆえドゾンらによれば、地政学的単位としてのコートディヴォワールが近代史に出現しつつあったまさにこの時期、農業開発の点でも植民地行政の点でもフランス側の本拠に定められた領内南東部において、イヴォワール社会がやがて自ら方向づけていく移入民優勢(地元民劣勢)の傾向が、植民地権力の手でいわばたまたま先駆けられていたことになる。

### 3. 領内フロンティアの拡張Ⅰ 1920～1930年代

1920年代、領内南東部ではココア栽培が急成長をとげた。ただし結果論として語る以外、それはフランス植民地開発の成功を意味しなかった。もともと19世紀末の象牙海岸東部沿岸では、主要交易品が1830年代以来のヤシ油から内陸産のゴムに転ずる一方、ココア生産は英領黄金海岸にみられるだけ

だった。当のゴム生産にしても、アカン系地元民の従来の経済構造にフランスが介入を図ったため、いまだ介入度の低いゴム生産に住民が経営を切り替えた結果の現象だった。以後、ゴム生産の現場にもフランスが介入をはじめ、第1次大戦前夜にゴム相場が下落したことも手伝い、「東」住民は新たな次善策として一斉にココア生産へ乗りだした。だがこの点でも、フランス側の思惑は外れる。フランスは20世紀初頭のココア導入に際し、地元民を集団農園で労働させる方針で臨んだが、住民側の激しい抵抗に遭い、苗木を破壊されていた。これに対し、1920年代にココア・プランテーションが地元民の間で急成長したのは、フランスがかつてのココア導入と同様の強制的手法で、綿花生産の導入を図ったことが影響していた。しかも「東」住民のココア生産は、集団農園を柱とする帝国側の青写真に逆らった、個別世帯レベルで進行的だった。英領黄金海岸の当時の活況に照らした現金収入への期待から、アニ地元民の間でことに過熱したというこのココアブームで耕地面積の急成長を支えたのは、他地域からの移入労働力だった。そこには先にふれた「北」のマリンケ人にくわえ、領内中央部のバウレ人、そしてベテをはじめとする領内南西部、「西」からの移入民がふくまれていた。

アニやジュラに比べ「バウレ」の名は、植民地開発への適応度に応じて民族を分類・階層化するフランス側の初期の文書記録から脱落する傾向があった（cf. Memel-Foté [1999: 23]）。植民地化以後のバウレの経済活動には「勤勉な農民」や「有能な商人」といった単純なラベルを施しがたい面があり、労働力をエスニック化し本質主義的な分類を図るフランス側の視線もそれだけ攪乱された点をドゾンらは指摘する。軍事平定期に激しく抵抗した「森の蛮族」バウレのなかには、以後も村での強制労働を嫌って沿岸都市部に逃れ、商人、職人、雑役夫など、植民地行政が関知しがたいインフォーマル経済に従事する者が続出した。そしてココアブームの1920年代、バウレ移入の波はいまやアニ居住域に向けて加速した。同じく「東」へ移入したマリンケ人が「中継商人」としてのフランス側の期待を裏切りココア生産者へ転じたように、バウレ人もいまや新参の「農業移民」として、稼働直後のプランテーション

経済へ積極的に参入した。移住プロセスを図式的にみれば、彼らはまず、移入先のアニ地元民( *autochtones* )の特定世帯に労働力として雇用される。土地へのアクセスは当初、食糧作物生産の用益に限られるが、やがて地元民から土地を譲渡されて生産対象をココアに広げる。一時的な移入民( *allogènes* )から移入先の土地を所有する移住民( *allochtones* )に転じて自らココアプランターとなる彼らは<sup>11)</sup>、以後、地元民プランターと肩を並べて、新参の移入労働力を吸収するという構図が反復した。こうしてアニ居住域にくわえ、1930年代には「東」の各地にバウレプランターのコミュニティ群が出現する。彼らは1930年代末時点で、プランテーション経済の成長と領内フロンティアの前進を体現する、その不可欠な原動力となっていた。

個別の論考をまたいでドゾンらが一度ならず指摘するのは、プランテーション経済が稼働をはじめるちょうどこの時期に、地元民／移住民間の増大する社会的緊張を反映したかたちで「イヴォワール公共生活」( *vie publique ivoirienne* )が形成され、そこに国民意識の初の萌芽を兆す現象が生じた点である( 私ならばこれを、近代の主体の同一性を想像するモラルの問題系と結ばれた、自律的中間集団の発生と呼びかえるだろう)。1920年代末からアビジャンをはじめ「東」の都市部に出現した民族系結社のうち最大のものは、植民地教育を最も早くから享受したアニ出身のエリートが先導する象牙海岸現地人權益防衛協会( *Association de Défense des Intérêts des Autochtones de Côte d'Ivoire: ADIACI* )だった。彼らが地元權益の侵害者とみなしたのは、第1に領内のアフリカ人行政補佐職を当時独占していたセネガルやダオメ出身のエリートであり、地域主義と交錯した国民意識の萌芽がまずこの点に認められる。さらにADIACIは、土地の譲渡を通じて移住民に転じつつあったバウレ出身のココアプランター層にも対抗していた。インフォーマル部門のさまざまな職種に参入することで進行したバウレ人の「多型的」( *polymorphe* )な南部移入が最終的に1920年代以後のココア・プランターへの事業転換をもって本格化したとすれば、南の地元民との経済対立を惹起したほかならぬ彼らの多型性こそ、ADIACIを含めた「イヴォワール市民社会」の萌芽的形成を促したことになる。



換言すれば、プランテーション経済の発展過程には、領内労働力の単なる移動という以上に、「イヴォワール社会のバウレ化」(baulisation de la société ivoirienne)と呼びうる特質が早くから刻印されていたとドゾンらは解釈する。

#### 4. 領内フロンティアの拡張Ⅱ 1940～1970年代

続く1940年代には、領内フロンティアの進行方向が一変した。1930年代後半から本格化したコーヒー生産がココアと連動し、プランテーション開発の新たな波がバンダマ川以西の「西」に向かいはじめたためである。遅くともこの時点で領内最大の人口規模にあったと推定されるバウレ人の移入先も、これにともない「西」に転じた。プランテーション経済第一波が「東」で生じた際には自らの思惑をことごとく外し、大量の労働力移動で勢いづく現地社会独自の経済過程を驚きとともに見守るしかなかった植民地当局も、今回は、バウレ人にくわえ「北」のマリンケ人とセヌフォ人、および1933年から象牙海岸に一部併合されたオートヴォルタ住民の「西」への移入を奨励する方針を打ち出した。その結果、地元民から土地を譲渡されて移住民に転ずる移入民は、一時代前の「東」と比べはるかに層が厚く多様な構成となった。御しがたい蛮族の地から一転して開発の主舞台と化した「西」とりわけ移入労働力が集中したベテ居住域においては、地元民ではなく大量に押し寄せたこれらの移入民こそがプランテーション経済の伝導者の役割を果たしただけに、彼ら移入民と地元民との社会的な優劣関係も、初発から即座に逆転する危うさをひめていた。

ドゾンらのプランテーション経済史観でおそらく最も革新的な部分は、これとほぼ同時期に生ずる脱植民地化政治運動の原動力を、フロンティア拡張第二波でいっそう顕在化していく「イヴォワール市民社会」の特質と関連づけた点にある。知られるように、同国政治史上の1940年代とは、アフリカ人農業組合(Syndicat agricole africain: SAA)やRDAの結成を介した政治指導者ウフェ＝ボワニ登場の時をさす。このうちSAAには、輸出用作物生産の労働力

調達や流通システムをめぐる人種間差別の撤廃という明示的目標をこえた次元で、ある傾向性が備わっていた。SAA幹部の大半は、領内移入民としての社会的背景を色濃くおびたパウレやマリンケ出身の、大プランターないしプランター兼商人（*commerçants-planteurs*）層からなる一方、東西両フロンティアの地元民にあたるアニやベテの代表性には乏しかった。

1940年代以降に顕著な人口増加を示すパウレ話者（Chauveau [1987: 133-135]）は、本来の居住域である領内中央の村落部でコーヒーを軸とした農業の多角化を進める一方、領内南部の都市・村落双方に向けたその移入の動きは止むことがなかった。マリンケ人とオートヴォルタ出身者、そしてパウレ人は、時に競合しつつもいまや共に、開発の新天地「西」をめざした。そこは森林の豊かさに比べて人口密度が低く、移入民から移住民へ転ずるための土地獲得戦略も、それだけ容易に行使しえたためである。だとすれば、同時期のイヴォワール公共空間でパウレおよび「北」出身者の移入民連合からなる中間諸集団が結成され、労働力調達の機会均等がその表層のモラルに掲げられたとしても不自然ではなくなろう。かくしてドゾンらは結論する。脱植民地期にウフエ＝ボワニが主導した団体とは、SAAであれPDCI - RDAであれ実はそのいずれもが、「地元民性に抗する移住民性の運動」（*le mouvement de l'allochtonie contre l'autochtonie*）を体現する主体であった。なかでもウフエ＝ボワニの出身民族パウレは領内中央を本拠とする点で、当の移住民性に劣らぬ地元民性をも具現していた。その特異な位置づけが帯びる機能上の多型性（*polymorphisme fonctionnel*）ゆえに、パウレは領内のどの民族にもまして、植民地帝国に対峙するイヴォワール市民社会の形成プロセスを象徴する存在となりえたのだった。イヴォワール住民が独自のしかたで急発進させたプランテーション経済を植民地権力が当初傍観するほかなかったように、その20年後に訪れたウフエ＝ボワニのSAA結成とは、いまや植民地帝国から完全に独立した「土着のプランテーション経済」（*économie de plantation indigène*）の生誕を告げていた。ただしSAAは、プランテーション経済に参与したイヴォワール住民全体の利害を代表するというより、移入民勢力の特殊利害を優先

させた団体だった。フランス共産党との訣別（＝「自由フランス」流リベリズムとの和解）を経由したPDCI（コートディヴォワール民主党）の勝利、および1960年の共和国独立もまた、植民地型の統制経済に対する自由主義経済の勝利であるとともに、生成途次のイヴォワール社会を独自に彩ってきた移住民主導の運動体、プランテーション経済そのものの勝利宣言を意味していた。サロー（Albert Sarraut）以来の語彙を流用して独立直後1963年にウフエ＝ボワニが唱えた有名なスローガン、「土地はそれを開発する者に属する」（La terre appartient à celui qui la met en valeur）も、それゆえ上記の史観に従えば、まったく新たな底意を帯びることになる。

マリやブルキナファソの移入労働力を積極的に摂取しつつ、独立後も「西」を貪欲に前進しつつけたプランテーション経済の第二波は、国内南西部沿岸にサンペドロ（San Pédro）港が開港する1971年、ついに領内フロンティアの最終局面を迎えることになった。

## 5．小括

以上、3期の時代区分にまたがり展開するドゾンらのプランテーション経済論には、土地をめぐる村落社会の倫理にふれた重要な箇所がある。次節でふれるこの論点を除いても、彼らの呈示する歴史認識には、なおいくつかの意義がみいだせる。

第1に、プランテーション経済論は、脱植民地化以降のイヴォワール政治史を新たな角度から読みかえる可能性を開いた。その好例にあたるのは、国内南部の大プランターに先導された（と従来解釈されてきた）脱植民地化の政治運動で、コーヒー・ココア生産適地でない「北」出身のエリートがなぜ重要な役割を果たしたのか、あるいは逆にウフエ＝ボワニが組織した中間諸集団（SAA, RDA）をめぐり、コーヒー・ココア栽培地としては大差のない国内南部でなぜ支持・不支持の分裂が顕在化したのか、その社会経済史上の根拠をドゾンらが解きあかした点である。コーヒー・ココア生産とは無縁な土地

である「北」の住民が領内移入民として演じた役割、および植民地の開発戦略から当初除外された「西」の住民がフロンティア拡張第二波を通じ「東」の地元民以上に受けた社会的衝撃への配慮なくしては、この国の時空間をロング・デュレとして貫く社会経済運動体、プランテーション経済の全貌は把握しえない。ドゾンらのいうイヴォワール市民社会とは、まさにその全体性を考慮するがゆえの表現だった。さもなくば、脱植民地期におけるパウレとマリンケの連合も、トップエリート間の相互懐柔という上部構造の一断片を切り取った臆断に訴える以外、ひとは語る手段を失うことになる<sup>(12)</sup>。

第2にドゾンらは、イヴォワール政治史における歴史主体の位置づけに抜本的な修正をほどこした。パウレ、アニ、ベテのような民族名称をひとまず揺るぎない実体であるかのように彼らが描くのは、植民地化の初期に創出されたこれら仮想の中間集団がプランテーション経済稼働後のイヴォワール社会に独自のしかたで再専有化された事実を（戦略的本質主義などという形容を用いることなく）尊重するがためである（Chauveau & Dozon [1988: 739]）。もともとドゾンは、民族を実体化する近代の視線を早くから批判し、民族の境界を人や物の流通も含めた広義のコミュニケーション・ネットワークの濃度差に解消するアムセル＝テレイ系の発想に同調してきた研究者である（Amselle [1985], Dozon [1985], Chauveau & Dozon [1985: 77]）。パウレの多型性をめぐる指摘でひととき鮮やかに表出するように、したがってその彼らが歴史主体の指標とみなすのは、従来のアフリカ政治史研究でもっぱら注意が向けられてきた「民族」でも「職業」でもない。じつは「パウレ」と「アニ」の対立が問題でもなければ、「伝統」の側にある村の「農民」、「近代」の側にある都市の「商人」や「植民地補助官吏」といった硬直した職業区分が重視されるわけでもない。ある時点における個人がどの民族名でラベリングされ、そのつどの経済戦略から「商人」「職人」「プランター」「官吏」のいずれを肩書とするにせよ、この史観にとり重要なのは、あくまで土地と労働力をめぐる生産関係の基軸、すなわち「地元民／移住民」の対立関係でこそあり、その関係を現に生きた文字どおり多型的な諸個人の姿が、社会経済史上の真の歴

史主体として再認されていることになるからである。

ドゾンらの歴史認識を貫くアフリカの主体の顕揚という物語は、1980年代以後の人類学が新たな民族誌の文体の必要に迫られ見いだした方法論的ツールのひとつである。コートディヴォワールの経済発展を個人支配者の偉業に帰する伝記作家にも、逆に「南」の従属構造が生みだした幻影とみなす体制告発者にも抗するかたちで彼らが顕揚したのは、同国の政治経済史を独自の色に染めあげたイヴォワール社会の主体性だった。プランテーション経済がキーワードとなるのもそれゆえであり、この概念には輸出作物をめぐる経済過程という以上のある独特な意味の荷重、すなわち社会の命を吹きこまれた自律的な経済運動体とでもいうべき含意が込められていた。逆に植民地権力は、プランテーション経済の予告なき急発進を前に主導権を握れぬまま、傍観に徹するどころか当初はその妨害さえ試みた。たび重なる他者の介入に悩まされたあげくココア栽培の道に踏みきったイヴォワール住民の過去を顧みるかぎり、それゆえプランテーション経済はイヴォワール社会に強制された (*imposé*) のでも受容された (*accepté*) のでもなく、住民自身の手で専有 = 領有 (*approprié*) されたものと解すべきである (Chauveau & Dozon [1985: 70-71])。ようするに「カードを配ったのがたとえ植民地支配者であれ、現実にゲームを進めたのは住民だったのである」(Chauveau & Dozon [1985: 76])。

ならば、脱植民地化運動に身を投じた政治指導者ウフエ = ポワニの歴史的使命もまた、明白であろう。共和国の独立は与えられたものでも受容されたものでもない。ウフエ = ポワニの政治的勝利とは、強制労働型の植民地統制経済に対する、イヴォワール社会独自の経済運動体すなわちプランテーション経済の勝利を歴史の深層で告げていた。地元民性に対しつねに移住民性が優越するかたちで生成をとげたイヴォワール市民社会にあって、彼の出身民族パウレは終始その前衛を担ってきた (Chauveau & Dozon [1988: 744-745])。彼の築いた政治体制が移住民ブルジョワ権力の樹立とでもいうべき偏向を何ほどか帯びていたにせよ、ウフエ = ポワニという主体を擬したこのテキストは、むしろイヴォワール社会の集会的エネルギーを一点に収束させたその化

身として、ドゾンらには了解されていたとみて大過あるまい。

この発想に宛てて送り返されるべき問いは、それゆえ倫理の問いとなる。問いはこの場合、ウフエ＝ボワニ自身の統治倫理のみならず、「考察対象」をめぐる研究者側の倫理、つまり歴史主体の同一性を探りだすドゾンらの政治規範にも向けられる。歴史主体の修正作業とは、研究者が対象の外部に居ながらにして対象の内に探りあてた主体の同一性を当事者に代わり（または当事者と同列のレベルで）想像するという、それ自体政治的なふるまいを意味するからである。

そのためにまず、彼らが市民社会というときの語用の特質を確認しておこう。新たな視座のもとで争点化された今日流の市民社会論と比べたとき、同じ概念をめぐる彼らの語用にはある違和感がともなう。それは彼らが、市民社会と市場を概念として分離していないためである。彼らのいう市民社会には、市場の契機が強く伏在する。正確に言えば、リベラル・ブルジョワジーの台頭を連想させる側面がイヴォワール・プランテーション経済史にみられることも手伝い、ドゾンらの語る市民社会は、一定の階級性を前提とした18世紀以来の商業社会＝市民社会の規定にことのほか近い。「プランテーション経済」と「イヴォワール市民社会」が像として重なりあうのもそのためである。さて、社会の推進力が市場原理とほぼ一体のものとして想念されるとき、集合的主体の同一性にまつわる想像力を市場外要素への言及なくして語るという作業が論者の企図に反し、あるいは対自的階級なる概念を導入でもしないかぎりはいきわめて困難となることは疑いを入れない。たとえばそれは、アミン流の従属論が経済主義の先入観に囚われるあまり、自らが弾劾する帝国主義の構造をじつは再生産しているのだと指弾する一方で（Chauveau & Dozon[ 1985: 64-65 ]）、「プランターの経済行動は、商業経済の合理性を忠実に表現していた」（Chauveau & Dozon[ 1985: 73 ]）点をもってイヴォワール社会の主体性を顕揚するという、彼らの記述の揺れにも表出する。彼らがここで引きあいに出す「経済主義」（*économisme*）という術語が、市場の自己調整機能に照らした市場外要素の位置づけをめぐる古くからの経済学論

争の延長で、少なくとも20世紀半ばに到るまで市民社会における倫理構築の意義(階級闘争を防遏する連帯の倫理であれ、国家に対抗する生産者の倫理であれ)を唱える側の論者が論敵(リベラリストであれ、脱スターリン化以前の「マルクシスト」であれ)に非難をさしむける際の常套語であった事実を、ここであらためて想起しておく必要があるだろう。ドゾンらの言説がモラル・エコノミー論流入以後の人類学に属することも併せて考えれば、論敵に向けたこの語の使用が、モラルの問いをめぐる自説の方向性のある程度まで決定づけていたことに、彼らはいささか無頓着だったことになるのかもしれない。

いずれにしろ、このとき残される道はひとつしかない。ウフエ＝ボワニなる個人の姿で具現したイヴォワール社会の力、その同一性を支える倫理をリベラリズムそれ自体の規範と重ねあわせて想像する企てである。外部の研究者が自らの議論に託す政治規範は、対象社会にとりそれ自体がひとつの規律権力に転ずる危険をつねに秘めるかぎりにおいて、ならば彼らのこの企ては何を意味していたのか。かつてドゾンらは、ウフエ＝ボワニの運営するイヴォワール国家が、社会との関係で植民地帝国と同じ位置を占めてしまったことを慨嘆していた。市民社会の自律性を保証するプランテーション経済のダイナミズムに国家が再び介入を図り脅威を与えてしまった結果、市民社会との有機的な結びつきが弱化しているという懸念である(Chauveau & Dozon [1985: 78])。外部からのそうした懸念の表明が、アフリカ諸国に向けた構造調整プログラムの到来とほぼ同時期であったという、そのいささかできすぎた符合が惹起しかねぬ深刻な問題性についてはこのさい措くとしても、脱植民地化期の政治運動にあっては「記号論的に透明」に繋がれていたかのような「下から」の倫理と「上から」の倫理との関係を、ならば彼らはいかに考えるのか。この場合の「下」にあたるイヴォワール市民社会の範囲を、彼らが村と都市の境なく設定したことは評価に値するとしても、市場としての市民社会を顕揚する論理が原理上抱えこまざるをえない難題すなわち排除の因子は、国家の統治倫理を社会倫理と「記号論的に透明」に繋ぐふるまいの内 で巧みに隠蔽されていないか。ひとが仮にそう問えば、イヴォワール社会で



排除された者は確かにいた，それは移住民権力の下で長らく資本蓄積の機会から排除されてきた地元民なのだという答えが返ってくるだろう。だが当地元民も，イヴォワール市民社会を構成する重要な歴史主体としてドゾンらの立論にはすでに書き込まれていたものであり，少なくとも論理構制としてそれが排除されていたわけではない。この問題は複雑である。「自律的主体たろうとする努力」を怠る者や「企業家的な活力」に欠けた者は「市民社会」の経済過程のみならずその構図自体からも抹消されるという規範のさらなる強化が1980年代以降における新自由主義の特質だとすれば，イヴォワール社会における移民排斥現象の高まりを指弾するドゾンの「正論」からさえ(Dozon [2000])，言説資源や「主体的行動」の不在ゆえに脱落していく「イヴォワール市民」はいないのか。個人支配者を発信源とした「上から」の倫理が届けられる「下」の場所には，あからさまな対抗倫理の存在か，さもなくば水も漏らさぬ独裁の統治倫理に席捲された「倫理の不在」しか想定しないのか。人類学者ドゾンが何より重視する「農民の論理」(logiques paysannes)とは，プランテーション経済と統治倫理の共謀関係へとつねに回収可能な論理でありまた倫理なのか。

### 第3節 統治倫理と村

#### 1. ウフエ＝ボワニの統治倫理

ウフエ＝ボワニの統治倫理を，リベラリズムに特有の，歓待と協調のエチカとしてひとたび捉えれば，「個人支配イデオロギー」の内実をこれほど明快に要約しうる事例もアフリカでは稀かもしれない。資本と労働力に対し国境を最大限に開放する一方，大量の国外移入民を含めた国内の全農業従事者に「イヴォワール随一の農民」(premier paysan de Côte d'Ivoire)という神話的な国家元首像を想起させ，同時に「国父」(Memel-Fotê [1991])の威厳や「ナ

ナ」<sup>13)</sup>の温情を示しつつ、輸出用作物生産の国内フロンティア漸進に向けた「労働」と「進歩」の連帯を呼びかける。政府完全出資の農産物価格安定公庫がコーヒー・ココア公定生産者価格の操作を通じてもたらす莫大な流通差益の裏側で、これらの表象が、システムの最大の犠牲者たる農民にイデオロギー上の代償 (contrepartie) (Losch [ 2000: 10 ]) として作用する。表象がイデオロギーにすぎない根拠は、ウフエ＝ボワニが純然たるプランターでもなく、農民だった試しさえない点にある。ドゾン流に言えば、特定の職業に執着しない多型的な戦略で資本蓄積をはたした一握りの移入民エリートを糾合しつつ国権を握ったウフエ＝ボワニは、「農民」や「プランター」などとは本来無縁な存在だった。しかも当の農民に過剰な介入を図った結果、本来自らの権力を産出したはずのイヴォワール社会の力、プランテーション経済の自律的活力を彼は自らの手で掘り崩してもきた。だからこそ彼はその補填として、イヴォワール社会の原像といえる「プランター」を自らの個人史に書き込み、かつ輸出用作物と食糧作物の区別をひとまず曖昧にしておける「農民 (paysan) のナショナル・ユニフォームを、独立直後から身にまとったのだと。

さながら20世紀前半の西欧諸国における「倫理」の呼びかけが現実の社会政策とワンセットで内乱防遏にむけて作用し、労使間の「協調」が階級対立の存在を抹消すべく機能したように、生前のウフエ＝ボワニが好んで口にした「対話」( dialogue ), 「平和」( paix ), 「和解」( réconciliation ) などの語彙も、上の理解に沿えばすべてリベラリズムの寛容を彩る美辞であったことが知られてこよう。ブルジョワジーの関心が、かつてより特定の政治規範ならぬ「特定の均衡」( グラムシ [ 1994b: 242 ]) にあったように、単独政党PDCIもまた、自らが特定の教義やイデオロギーに何ら浴さぬ組織である点を強調する傾向があった。「我が邦にはいかなる民族資本家も存在しない」と断ずるウフエ＝ボワニ1947年の発言を引きながら、PDCI転向以前のルクーがそこに現地搾取階級存在を隠蔽するイデオロギーを看破したように ( Loucou [ 1977: 96-97 ] ), 党指導者層は自国における階級分化の内実を知悉していたからこそ、党ないしアフリカ民主連合 ( rassemblement ) の下にイヴォワール社会の全階級・階

層出身者を連合させる (rassembler) 方針で臨んだことにもなるだろう。

PDCIは、独立前夜の選挙連合に乗じて競合諸政党を吸収し(佐藤[2001: 166]),当時の主要な利益団体を党の準下位機関に取り込むことで成立した単独政党である。国内の全中間集団を国家に協調させる方策は、それゆえ他の仏語圏西アフリカ諸国(ex. 真島[2004a])にもまして円滑に進行した。独立直後の時点でコートディヴォワール労働者総連(Union Générale des Travailleurs de Côte d'Ivoire: UGTCI)が創設され、国内の全職業別組合組織はUGTCIへの加入か、国家認可を要する全国組合連合の創設を義務づけられた(Woods[1994: 467-468], Mundt[1987: 132])。PDCIを、国家運営の主導的地位に就いた「統治的結社」と規定する佐藤[2006a]の卓抜な発想を借りれば、逆に統治的結社とは、それ自体でひとつの巨大な中間集団を擬装する国家の別名にもなるだろう。この種の体制下では、「現代の君主」を僭称する単独政党が法人(personne morale)から自然人(personne physique)すなわち過去の君主の姿へと、「記号論的に透明」に退行する現象がしばしば生ずる(グラムシ[1994a])。政情に影響を及ぼしかねない集合行為には過剰に反応しがちだったウフエ＝ボワニが、武力行使の稀なケースを除いて活用したのは、この国家組合の臨時総会とでもいうべき「和解」と「平和」の国民大対話集会(Grand dialogue)であった。1969年以来、国父の意向しだいで随時開かれてきたこの集会には、UGTCI傘下の各種職業別組合・利益団体代表、地域代表、PDCI婦人部・青年部代表のほか、在留外国人組織の代表や、時には反体制を貫く少数の自律的組合の代表までが招かれた。出席者は国父を前にいかなる意見陳述も許され、場合によっては集会終了後に特定組織の代表者が政府要職へと吸収された。さらに「対話の地方分権化」(décentralisation du dialogue)を唱うミニ集会も、国内各地で地元住民を対象に開かれた(Amondji[1986: 109-114], Cohen[1973: 244-245], Toungara[1990: 34-35])。和解・対話・平和を旨とするこの統治倫理が、一方では1963年の同国政界を揺るがした「謀略」事件以来、国内危険分子への処罰と(国父への忠誠を条件とした)事後の赦免との巧妙な結合からなるウフエ＝ボワニ一流の人心掌握術を生み<sup>(14)</sup>、他方では

アフリカ政界屈指の「老賢者」(le Vieux) による「ガニョアへの和解の旅」や「南アフリカとの対話」のごとき特異な語法も生んできたことは知られる通りである。

この統治的結社ないし組合国家 = 国家組合の空間において、ならば民族という中間集団はいかに位置づけられたのか。また民族の本拠として想念される村とは、統治倫理にとりいかなる空間を意味したのか。

ウフエ = ボワニは、一党支配と民主主義の矛盾について問われるたびに、60もの部族を擁する国家にとり国民統合がいかに歳月を要する難事業たるかを回答に代えてきた。アフリカは独立に際して国家(Etat)を与えられたが国民(Nation)は与えられなかったとする言説は、むしろ彼にかぎらず、ある時期の社会科学には国民建設の近代化論を、1960年前半の人類学にはナイジェリア問題も事例に入れた統合革命論を導いてきた<sup>(15)</sup>。近代化と経済発展の足枷という口実で「部族系結社」を抑圧した他のアフリカ諸国と同様、特定の人種・部族的出自にもとづく結社活動をいっさい禁止する旨がこの国の憲法条文にも明記された。同時にウフエ = ボワニは1963年の「謀略」事件に際し、それまで国内各地の民族系結社を吸収して成った党下部の小委員会を全廃し、パン・エスニック政党としてのPDCI像を強化した。ただし、この路線転換は早々に頓挫する。1965年PDCI第4回党大会の席上、彼は件の憲法条文に手をつけぬまま、党中央が地方との関係を維持することの意義を訴えたうえで、党員各自による関係強化の具体的な努力を党政治局員就任の条件にさえ数えあげたからである。エスニシティの明示的な旗揚げはなおも法が禁じているため、閣僚をはじめとするアビジャン在住の党幹部が郷里で一斉に組織をはじめた事実上の民族系アソシエーションは「開発結社」(association de développement)と命名された。以後も、国会議員の選出法を従来のリスト承認制から個別選挙制に変更する法修正が1980年になされると、集票マシンとしての機能を期待する開発結社創設の新たなブームが、国内各地で生じていった(Woods [1994], cf. Baudouhat [1994: 28-29])。

民族の位置づけをめぐる独立直後の試行錯誤から開発結社の創設に到る上

記の経緯は、ウフエ＝ボワニが国内の産業諸部門と同じく民族についても、各集団の代表を通じて支配と統制の回路創設を図っていた事実を示すものである。だとすれば、民族という中間集団は経済発展の足枷どころか分割統治の効用として、スィラのいうイヴォワール型国家資本主義 (capitalisme d'Etat) (Sylla [1985]) の円滑な進展に寄与していたとも考えられよう。

植民地期の統治技術をさす「分割統治」の表現を、私はここで意図して用いている。かつての仏領西アフリカでは、植民地化の事業が「古代王権」や「封建制の軛」から黒い人民を解放する新たな市民革命として想念された。地域固有の王国組織は「封建的ギルド」と大差ない悪しき部分社会として解体され、代わりに植民地帝国の具に供するだけの人工的な中間集団が造られた。主に言語の異同に拠りつつ、現地労働力の効率的収奪を目的に植民地行政首長の任命とほぼ並行して境界づけられたこれらの集団には、「種族」と「部族」の概念化が施された (真島 [1999])。軍事平定完了時点での植民地は、かくして帝国国庫への貢献と翼賛を義務づけられた官製団体「種族」と「部族」で一部の隙もなく埋めつくされた、部族コーポラティズムとでも呼ぶべき労働空間と化していた (真島 [2006a: 30])。労働倫理の多寡 (植民地開発への適応度) に準じて階層化されたこれら原住民労働力のエスニック・カテゴリーは、もとより曖昧だった。だが、統計集団としてのカテゴリーの曖昧さはシステムの障害になるより、むしろその曖昧さこそがシステムの運用には不可欠だった。プランテーション経済が稼働する以前の「パウレ」が「アニ」に包含され、行政文書中にその名がみえない時期があったごとく、資本主義の史的システムにとり、エスニックな労働力カテゴリーの流動性や柔軟性は、そのつどの経済過程にシステムが順応するうえでじつに有効な変換子として機能したためである (Wallerstein [1997: 114])。

植民地期における部族コーポラティズムの統治手法は、地方行政と国庫管理双方の点で、ウフエ＝ボワニの個人支配にそのまま転用された可能性がある。民族 (> コミュニティ) と職業集団 (> アソシエーション) という、組織動員の実態に照らせばあまりに硬直した概念区分さえ取り換え、コート

ディヴォワールにかぎらず独立期の仏語圏西アフリカ諸国にしばしば生じた官製全国労組連合によるコーポラティズム体制の全体が、植民地期の部族コーポラティズムを範型としていた可能性すら考えられる。しかもこのとき相続されたコーポラティズムは、構造的にクライアンテリズムの統治原理を内包していた( Sylla[ 1985: 36-37 ])。「地元民性の防衛をめざすいかなる試みにも敵対」( Chauveau & Dozon [ 1988: 744 ])したウフエ = ボワニは、フランス植民地期における現地首長の選出法さながら、党中央に吸収すべき国内各地の地域「代表」を地元ではほぼ無名の人物から選びだし( Bakary [ 1984: 38 ]), 同時にそうした人材からなる権力中枢の各部局ポストが妥当な民族配分を構成するよう留意した。「悪しき部分社会」たる自律的労組が全国労働者総連の一細胞として「正しく」改組されたごとく、あるいは顕著な政治組織や指導者が見あたらない場合でさえ「部族」や「首長」を強引に造った植民地帝国のごとく、初期のPDCIも時にはまったくの無から「正しい民族組織」を創造した。「我々は民族結社(ethnic associations)を党の小委員会に加工した。結社が不在の地域については、諸部族が独自の結社を組織するよう我々が手を貸したのである」<sup>16)</sup>。

ウフエ = ボワニが社会的なるものをめがけて築いたコーポラティズムの権力布置にあって、その末端に位置する村とは労働の空間を意味していた。彼の統治にかぎったことではない。思えば西アフリカの村は、システムの眼にとりつねに労働空間でしかなかった。リーブルヴィルでの苦い蹉跌をふまえフランス植民地帝国が1880年代から西アフリカ内陸に点々と創設した解放奴隷入植用の「自由の村」(village de liberté)が、現実には住民の逃亡をいっさい許さぬ労働の煉獄を意味していたように( Bouche [ 1968 ]), 独立後の共和政体下ですら、村は依然として「象牙の奇跡」を死守するための労働空間を意味していた。幹線道を活用して強制労働と税徴収、および生産物の流通を円滑化する目的から、フランスが既存の村落を焼き払ってまで強行した植民地期の村落移住再編政策は( ex. 真島 [ 2000a: 199, 234 ]), 共和国の独立後も形をかえて存続した( ex. Schwartz [ 1971: 26-27 ])

他方、内務省の任命で地方に派遣される行政エリートとしての県知事、郡知事は、各自の出身地域を避けて任官地が決められたため、地元住民とは無縁な、植民地期さながらの外来権力の代理人に等しかった。県・郡庁所在地の大半はかつての植民地拠点であるうえ、植民地行政官の旧宅がそのまま知事公邸に充てられることもあった。フランス共産党を模して組織されたPDCI-RDAの垂直的な権力構造の下、党の地域細胞にあたるPDCI県支部・郡支部の支部長もまた、地元出身者とはいえ村落の日常からは遊離した人物だった。その点、「政党国家」という概念規定の妥当性をめぐり内務省所属の知事と党地方支部長の相互抑制効果に着目する研究者の議論とは、あくまでシステム（またはシステムを俯瞰する個人支配者）の眼に仮託した議論であり、当のシステムに余儀なく位置づけられた当事者たる農民からみれば、護衛付で村の「視察」に訪れ、管轄地域の全村長「召集」による集会の場で農民を待ちうける知事も党支部長も、いずれ外部由来の権力者にすぎなかった。

## 2. 「西」とダナネ

モラルの問題系に留意する本章のねらいは、この徹底して労働空間としてのみ表象されてきた村という場で生起する倫理の様態を考えることであった。個人支配の主題と関連づければ、とりわけここでは国民なる主体の同一性に向けられた村の想像力の内実が問われるべきであろう。前節でふれたプランテーション経済論をふまえつつ、「西アフリカの語りの魂」の現場、ダナネ県ダナン村落社会の事例へと、最後にいま一度立ち返ることにしたい。

国内の慣習的な地域区分に従えば、ダナネはまちがいなく「西」である。プランテーション経済の拡張第二波が生じたのはバンダマ川以西の熱帯林であるから、ドゾンらのいう「西」にも、ダナネは当然含まれていたと考えるほかない。この場合の「西」とは、フランスの植民地開発拠点構想から早々に除外され、以後は現地労働力の単純供給地として処遇されてきた土地をさす。そのため第1に、「西」の地元民に課された強制労働の実態は「東」に比



べ格段に苛酷だったうえ、住民の一部は「東」のココア・プランテーションに補助労働力として投入されることさえあった。第2に「西」は、アフリカ人プランターと「東」で競合することを嫌うヨーロッパ人プランターが入植を試みた土地でもあった。その意味において「西」は、長らく「二重の植民地化」(double colonisation)に苛まれてきた土地である点をドゾンらは強調する。その後コーヒーブームの下で植民地当局がオートヴォルタの労働力調達にのりだしてフロンティア拡張第二波が訪れたとき、プランテーション経済に参入する機会をそれまで二重の意味で奪われてきた「西」の地元民と新参移民との間で なかば必然的に土地紛争が頻発した(Chauveau & Dozon[1985: 71-73])。開発の主舞台となったベテ居住域でことに顕在化したこの対立は、移住民権力の象徴たるウフエ＝ボワニが国権を掌握したのちも存続した。深刻な紛争に発展した事例だけでも、1960年代末ガニョア(Gagnoa)におけるベテ地元民・パウレ移住民間の紛争、1985年ズクブ(Zoukougbeu)におけるニャブア(Niaboua)地元民・パウレ移住民間の紛争、1990年代前半におけるベテ、グロ(Gouro)、ディダ(Dida)各地元民・パウレ移住民間の紛争があげられる(Chauveau[2000: 99])。ベテ出身のサンディカリスト、バボを旗手とするイヴォワール反体制社会運動の過去、および今日の内戦にいたる国内政治史の根底には、抑圧された「西」の地方史を横糸とする、地元民・移住民間の社会的緊張がつねに伏在してきたとみなす点が、ドゾンらの史観の特質である。

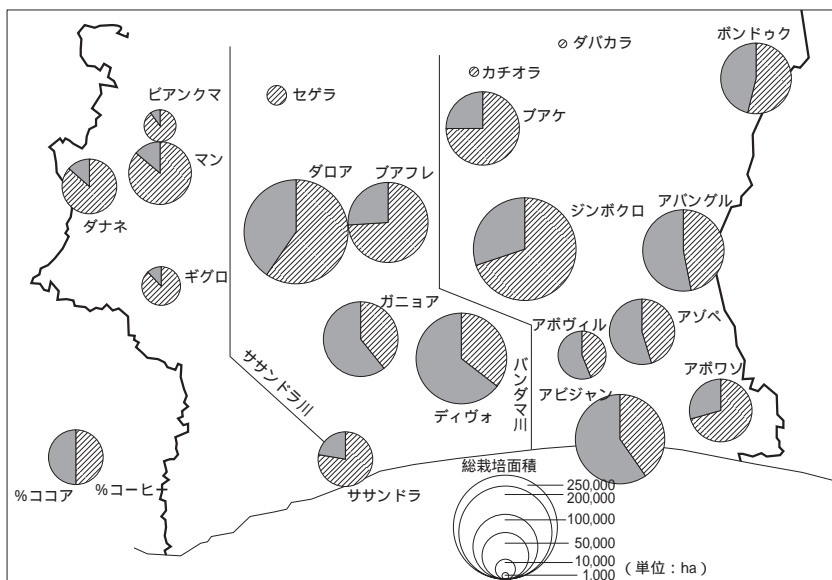
彼らの歴史認識を前に、だが私は素朴にこう問うことにしたい。上記の史観で描かれる「西」とは、現実にイヴォワール国境内のどの場所までを指すのか。たとえばリベリア国境にほど近いダナネは西の最果てとさえいえる地理的位置にありながら、そこにはドゾンらのいう「西」があるのかと。プランテーション経済論でいう「西」にダナネが含まれるか否かをうらなう理論上の試金石は、次の3点となるだろう ①プランテーション経済の波及を証拠づけるコーヒー・ココアの生産状況、②国内フロンティアの拡張第二波を特徴づける移入労働力の民族構成、③土地所有をめぐり1940年代以降に生

じた地元民と移住民の対立関係。

1988～1997年に私がじかにふれたダナネ県ズアン＝ウニアン郡の情勢のうち、上記①と②にかかわる諸点をまず簡単に書きとめておこう。コーヒー農園については、郡内のどの村落でも私は目にしてきた。対するココアは、栽培適地の環境制約が厳しいため一部でしかみられなかったが、カヴァリー（Cavally）川やヌオン（Nuon）川流域には、ココアが盛んに栽培されている村があった。ココアはコーヒーに比べ生産者価格の点で実入りがよいため、栽培適地にあたる村は周囲の住民から羨まれていた。ダン地元民以外でコーヒー・ココア生産に従事していたのは、おもにマリンケ移住民である。住民数が500人をこえるような村には、しばしばマリンケ移民が独立の区画を与えられ、ダン地元民と共住していた。彼らは村の特定の父系リネージから譲渡された土地で、陸稲やマニオク、ヤムイモなどを他の野菜と混作させた食糧作物生産、およびコーヒー栽培を営んでいた。とはいえ、おそらく共和国の独立前後にギニアからの移入を本格化させた彼らは、植民地当局の移入奨励策でその先陣がダナネ地方に到来する1910年代以前から、ダン地元民との間で長らくコーラを主品目とする長距離交易を営んできた北マンデ系商人の末裔である。

バウレ移民はズアン＝ウニアン郡の農村部でほぼ皆無だったのに対し、ブルキナファソのモシ（Mossi）人はときおり見かけた（たとえば私の滞在村は人口800を越す大村落だったが、村内在留のモシ人は時期により2～3名にすぎなかった）。モシ人のイヴォワール移入プロセスには、一般にいくつかのフェイズが確認できる。すなわち、当初は単身の季節労働者として移入する彼らは、やがて移入先で土地を譲渡されて滞在期間を長期化させる。移入民から移住民となるこの段階で、移入の形態も単身出稼ぎ型から家族同伴型に変容し、これにともない統計上の移入民人口が急増するというパターンである（Blion & Bredeloup [1997: 714-715]）。その点、ダナネの農村に流れ着くモシ人はそのほぼすべてが独身青年であり、彼らは特定のコーヒープランターに賃金で雇われ、自らの土地をもたぬまま一定額の貯蓄とともに短期で帰国していた。

図3 主要産地におけるコーヒー・ココアの栽培面積と内訳



(出所) Boni [ 1985 : 26 ] に引用者が一部加筆。

そのうちの一人がある時、村人のヤギを盗んだことがあった。村の若者がときに遊び半分で犯す過ちであるが、村裁判では「村の子たち」に比べて格段に厳しい裁定がくだった。「よそ者の盗人」は炎天の下、ブリーフ一枚の姿で大樹の幹に縄で終日縛りつけられていた。ダナネ地方へのモシ人移入は、上の社会学的図式における第2段階にはとうてい到っていなかった。

私的な印象論の域をでない上記概略への傍証として、イヴォワール人地理学者ボニの学位論文「コートディヴォワール森林部におけるプランテーション経済」(Boni[ 1985 ])から若干の公式統計を引いてみよう。いずれも1979年前後の統計であり、先述のごとくこの年代は、イヴォワール経済がちょうど停滞局面へと向かう転換期にあたる。図3は、国内南部の主要産地におけるコーヒー・ココアの栽培面積とその内訳である。フロンティア拡張第二波から約40年が経過した「西」(バンダマ川以西)のうちでも、ベテ居住域のダロ

表2 コーヒー生産量の県別推移（1960/61～1978/79年度）

（単位：トン）

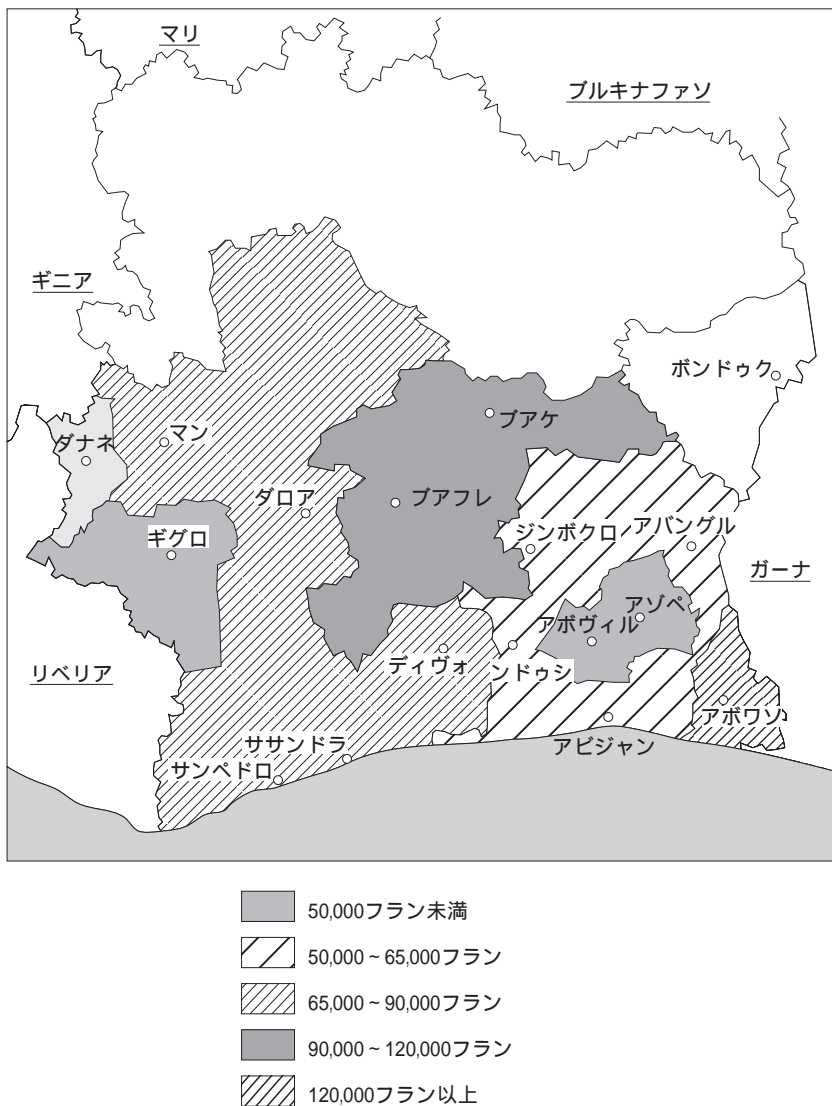
		年度						
	県	1960/61	1973/74	1974/75	1975/76*	1976/77	1977/78	1978/79
東	アバングル	15,000	20,400	21,000	26,600	23,000	12,500	16,900
	ボンドゥク	4,000	4,600	7,400	13,600	8,700	7,400	10,000
	アビジャン	10,000	12,200	15,600	18,400	17,500	14,000	16,000
	アボワソ	17,500	15,700	27,000	23,000	25,300	22,900	24,000
	アソベ	5,000	7,800	11,500	13,500	11,400	5,400	6,000
	アボヴィル	4,500	2,600	4,900	5,200	4,800	1,600	2,000
	ブアケ	26,000	8,100	21,500	29,800	23,200	9,650	20,300
	ジンボクロ	34,000	25,900	40,200	40,100	39,600	11,100	23,000
西（ササンドラ以東）	ブアフレ	15,000	11,700	22,000	25,100	20,400	7,500	22,000
	ダロア	12,000	21,900	29,300	36,900	32,100	28,000	33,600
	ディヴォ	9,000	13,600	18,000	19,900	19,900	18,200	36,000
	ガニョア	11,000	11,100	14,800	17,500	15,600	7,500	18,500
	セゲラ	1,000	1,500	800	2,000	2,000	950	2,500
（ササンドラ以西）	ピアンクマ	1,100	3,400	4,200	2,800	4,400	5,700	4,800
	ダナネ	8,000	11,600	10,200	10,800	13,700	12,500	13,000
	ギグロ	4,000	5,200	4,800	4,900	6,500	5,800	6,500
	マン	7,000	12,700	13,000	15,200	17,800	17,050	13,500
	ササンドラ	1,400	5,900	4,200	4,400	5,400	7,800	8,500
総計		185,500	195,900	270,400	309,700	291,300	195,550	277,100

（出所）Boni [ 1985: 256 ] をもとに筆者作成。

（注）\*原表での総計は308,800トンであるが、ここでは各県の生産量を優先し、表記の総計を得た。

ア（Daloa）以東と以西の間に、栽培面積の格差からみて第2の见えない境界線が走っていそうなことを、ひとはこの図から直観するだろう。おおむねササンドラ（Sassandra）川流域が第2の境界線を可視化するため、私はこれをササンドラ境界と仮称する<sup>(17)</sup>。次の表2は、独立後のコーヒー生産量をめぐる地域別・県別推移である。全般に「西」の生産量は「東」に比べやや見劣りがするものの、年代を追った成長率もふくめて「西」の内部にそれほど顕著な格差は感じられない。だがおなじ現実を単位面積当たりの平均収入額に変換すると（図4）、ダナネ県は同じダン居住域のマン（Man）県からさえ切り離された水準に落ち込む。図の5段階分類は全国平均を基準とした不均等

図4 ヘクタール当たり平均収入額の地域別比較（コーヒー，1979/80年度）



(出所) Boni [ 1985 : 332 ]

表3 ココア生産量の県別推移（1960/61～1978/79年度）

（単位：トン）

		年度						
	県	1960/61	1973/74	1974/75	1975/76*	1976/77	1977/78	1978/79
東	アバングル	10,800	17,100	19,900	20,200	18,300	25,600	27,000
	ボンドゥク	13,200	13,700	15,000	15,600	22,000	22,000	26,800
	アビジャン	11,700	14,000	19,900	20,300	16,000	18,400	21,000
	アボワソ	2,100	7,500	7,800	8,100	7,900	10,400	11,500
	アソベ	10,100	16,200	18,000	16,300	17,000	18,700	15,000
	アボヴィル	1,000	4,100	5,600	5,200	4,800	5,900	6,500
	ブアケ	8,700	10,800	14,000	14,100	14,500	14,300	15,100
	ジンボクロ	20,000	26,900	32,100	30,700	32,600	43,700	45,000
西（ササンドラ以東）	ブアフレ	3,300	11,200	13,000	15,800	15,200	21,200	26,500
	ダロア	1,800	26,000	27,500	21,850	20,700	38,400	40,500
	ディヴォ	6,200	32,200	36,300	29,900	30,900	38,900	44,000
	ガニョア	4,500	25,700	27,000	23,800	29,100	28,800	24,000
	セゲラ	-	100	100	100	200	300	-
（ササンドラ以西）	ピアンクマ	-	-	150	100	-	300	200
	ダナネ	-	300	750	900	700	2,100	2,000
	ギグロ	-	200	300	450	200	900	1,100
	マン	-	900	1,200	1,350	1,000	1,800	1,600
	ササンドラ	600	1,600	2,500	2,600	2,450	5,500	10,700
総計		94,000	208,500	241,100	227,350	233,550	297,200	318,500

（出所）Boni [ 1985: 265 ] をもとに筆者作成。

（注）\*原表での総計は228,350トンであるが、ここでは各県の生産量を優先し、表記の総計を得た。

区分であるだけに、ダナネの区分枠は視覚で直感される以上に有標性が高い。さらにココア生産の地域別・県別推移をみると、ササンドラ境界の存在はもはや疑いえないものとなる（表3）。

ダナネにおける移入労働力の民族構成については、1975年時点での県別外国人人口比率をあげておこう（表4）。この資料は国内移入民の動態を示すものではないが、それ以前に都市と村落を含めた外国人比率　プランテーション経済第二波を特徴づけるブルキナファソやマリからの移入民が含まれるべき比率　の次元から、同じ「西」に属する諸県のうちでも、やはりササンドラ境界以東と以西の間に顕著な段差のあることが窺える。

表 4 県別外国人人口比率（1975年）

（％）

東（国内南東部）	アバングル	48.9
	アビジャン（市）	45.2
	アビジャン（県）	29.6
	アボワソ	48.2
	アゾベ	22.4
	アボヴィル	31.1
	ボンドゥク	18.4
	ブアケ（市）	34.3
	ブアケ（県）	8.5
西（国内南西部）	ジンボクロ	25.2
	ササンドラ以東	
	ブアフレ	16.5
	ダロア	24.0
	ディヴォ	25.2
	ガニョア	24.0
	セゲラ	4.3
	ササンドラ以西	
	ピアンクマ	4.0
北（国内北部）	ダナネ	9.1
	ギグロ	9.2
	マン	6.9
	ササンドラ	25.7
	ブナ	8.6
	ブンジアリ	7.3
	ダバカラ	2.5
	フェルケセドゥグ	12.9
	カチオラ	5.5
	コロゴ	5.8
	オジェンネ	5.0
	トゥバ	3.3

（出所）原口〔1988:97〕をもとに引用者が編集。

数値に反映しがたい第3の試金石，すなわち土地をめぐる地元民と移住民の対立関係については，現地モノグラフの次元で確認するほかない。私は長期調査に先だち，イヴォワール計画省が1966年に発表した『マン地方総合研究』全6巻（MPCI〔1966〕）に目を通していた。ダン居住域での調査を計画し



ていたため、具体的な調査地を選定するうえで地域の社会経済状況を概観するこの文献が有益だろうと判断したためである。以後の私がじっさいに滞在することになるズアン＝ウニアン地域について、同書には、ダン地元民とマリケ移住民の間で土地をめぐる深刻な対立が生じている旨が記されていた（MPCI [1966: 23-24]）。1960年代中葉に地元でいかなる対立がみられたかは、以後の現地調査でも判然としなかった。農地の所有権をめぐる対立は隣接村落間でときに生じたが、土地紛争が地元民と移住民の間で顕在化した事例に、私は一度も遭遇しなかった。たしかにダナネ地方には、マリケ人の移入を頑なに拒んできた村があった。だがそれは、譲渡された土地で移入民が輸出用作物を生産することにより地元民との権力関係を覆す可能性が危惧されていたためではない。その種の村は、後述する男子結社との関係で、移入民ではなく 新参者の移入による村の拡大はむしろ歓迎された 植民地期のフランスをふくむ外来の文化要素全般を拒絶していたのであり、個々のプランテーションの所有権を争う以前に、外来文化を具現するコーヒー・ココア栽培の導入自体の是非が住民間で争われた過去をもつ村だった。

西の土地ダナネは、プランテーション経済論でいう「西」から漏れ落ちていく可能性がある。ベテ研究者として出発したドゾンと、バウレ研究に専念した時期のあるショヴォーとが共同で築いた歴史認識に、それぞれのフィールドを反映した視点の偏りがある点については、このさい問うまい。それ以上に深刻なのは、第1に、対立する地元民と移住民の代表勢力として彼らが前景化させた民族カテゴリーこそ、現実のイヴォワール政治史でも根深い対立軸を形成してきた「ベテ」と「バウレ」であること、また第2に、仮にも「イヴォワール市民社会」を取沙汰する議論にあって、すでに立論の次元からその存在を抹消され、結果として彼らのいう市民社会から漏れ落ちた部分社会が国内に存在するかもしれないという、現実政治への影響度としてきわめて危険な一連の言説内容にある。彼らが主張するかぎりでの「西」がササンドラ境界の彼岸にまで届いていない可能性とは、近年のトランスナショナル研究で批判される内容とは逆向きの、いわば国境線を過度に圧縮した「方

法的ナショナリズム」がドゾンらに想定されていることの可能性に等しい。

プランテーション経済論から顕現しかねぬ仮想のイヴォワール国境線，ササンドラ境界の存在可能性は，モラルの問題系にいかなる影を落とすのか。プランテーション経済下の労働空間についてここで問うべきモラルとは，なにより土地と労働力をめぐる村落社会の規範となるだろう。土地と労働力の2因子は，異なる生産様式の節合局面に際してそれ自体が資本再生産の媒体になりうると同時に，特定の生産関係にもとづく村落社会の権力構造と倫理とを左右する媒体にもなるからである<sup>(18)</sup>。

この点についてドゾンらが注目したのは，西アフリカの村落諸社会に早くから見いだされてきた，いわゆる先着原理の規範である。一般に西アフリカの村落社会には，特定の地縁単位に属する住民のうち伝承上そこに最も早く住みついたとされる最古参の個人や血縁集団の子孫が，新参者にあたる残りの個人や集団の子孫に対し，社会的・儀礼的権威を付与される規範がある。基本構造は古参／新参の二者関係だが，むしろ第三，第四の新参者の出現とともに相対的な上下関係は延長される。このうち先着者は，後着者の「後見人」もしくは「主」（あるじ／ぬし）の資格をもって，「客人」にあたる前者を既存の社会構造内部に位置づけ吸収していく。主人は食事と土地を与え，客人はその恩義に種々の労働で報いる。給付と反対給付から構成される伝統的クライアンテリズムの一類型といってもよい。西アフリカ民族誌学では，商業民による長距離交易網の拡張プロセスを解きあかす原理として言及されることもあるが（ex. Brooks [1993]，Launay [1979]），古くは伝統王権における土地の主（ぬし）と戦争首長の権力関係をめぐる調査から，先着原理の存在が見いだされてきた。最古参の血縁集団の末裔にあたる土地の主は，先着原理にもとづく儀礼的権威を有する一方で，彼らを武力で征服して土地に定着した後着集団の末裔たる首長は，財と労働力の確保を基礎とした村落経済の世俗権力を代表するというものである。

さてドゾンらは，イヴォワール村落社会における先着原理の規範が，地縁社会内部の現実の権力関係を糊塗する「フィクション」として作用してきた

と断ずることから考察をはじめ。土地の主と首長の関係が暗示するように、新参者（les nouveaux venus）は移入先で地元民への同化プロセスに当初巻き込まれはしても、ときには暴力を、ときには交渉や契約の手段を用い、けっきょくは地元民＝先着者（les premiers arrivants）を従属させてきた。移入先で経済上の実権をにぎった新参者は、先着者に表面上の敬意を払い「土地の主」の儀礼的地位をあてがうものの、じつのところ儀礼的支配とは経済的従属のアリバイにすぎないという指摘である。征服国家論の表象にほぼ重なるこうした発想が、彼らのプランテーション経済史観にどれだけ有利に作用するかは明らかだろう。ドゾンらによれば、象牙海岸植民地総督府はおそらく先着原理の内実など知らぬまま「東」で移入民を優遇したのに対し、先着原理を知悉するアフリカ人ウフエ＝ボワニは、イヴォワール市民社会の伝導者たる移住民勢力を独立後も意図的に優遇した。しかも数百年をまたぐ民族移住のプロセスに照らせばイヴォワール国内に真の先住民といえる民族はいないだけに（真島 [1997]）、移住民性の優越にはそれだけ拍車がかかった。つまるところウフエ＝ボワニとバボの対立とは、つねに相対的でしかないだけに根のふかい、新参者と先着者の社会経済的対立にほかならない。ウフエ＝ボワニ死去後におけるバボの台頭も、プランテーション経済下で長らく敗北を続けてきた歴史の流れをくつがえそうとする、先着集団＝地元民勢力の悲願に支えられていたものと彼らは解釈する（Dozon [1997: 795-798], Chauveau [2000: 106-107]）。

ドゾンらガリベラリズムとの倫理的「節合」をかように企てた村落の倫理、先着原理の規範効果は、だがササンドラ境界以西に通用しない。少なくとも彼らの解釈は、ダナネのダン村落社会には適用しがたい。ただし、先着原理の規範がウフエ＝ボワニの統治倫理と何らかのしかたで結びつく点に限っては、以下のごとく境界の東西で事情は変わらない。

西大西洋中央文化圏の周縁にあたるダン社会には、数力村ないし数十力村の地縁単位ごとに男子結社ゴ（Go）の組織がみられる<sup>(19)</sup>。ゴは、村落社会の紛争調停を儀礼的に司る団体として機能してきた。ゴの指導者にあたる結社

長職は、各地縁単位に最初に住み着いたと伝承で語られる父系血縁集団の最年長の男性に継承される。村で再古参の血縁集団に属する最年長の男はその村の結社長となり、複数の村をあわせた地縁単位全体にとり再古参にあたる血縁集団の最長老が、各村の結社長を統括する大結社長となる。

ゴは、村の平和を重んずる（ダン語の直訳では「人が分かりあうための」）存在であり、同時に「客人」（nian）を呼び寄せてやまぬ存在ともされる。ゴは客人に対し善き「主」（dɛɛn）としてふるまうため、人が分かりあう場を提供する偉大なゴのもとにはそれだけ多くの客人が訪れるというのが、村落の発展にまつわるダン社会の原イメージである。

他方、かつてのダン社会には、「土地の父」（se dë）や「土地の主」（se dɛɛn: セデーン）と呼ばれる特別な男がいた。ただし彼は、民族誌学で一般にいう土地の主ではなく、逆に富者と戦争首長のいずれも意味するような存在だった。しかも先着集団を服従させて富者となる戦争首長とは反対に、先着集団の土地（ゴの土地）を防衛する戦争で陣頭指揮にあたり、敵からの戦利品をもとに富者となる「ゴの戦士長」にすぎなかった。とはいえ結社長の配下にあたる彼のもとにも、富の分与を求めて「客人」は集まった。ゴの結社長とおなじく偉大なセデーンの村も、こうしてしだいに拡大するというのが、集団的主体の同一性にまつわるダン村落社会の想像力を構成してきたのだった。

20世紀初頭、ダナネ派遣のフランス人司令官が「首長」の出頭を命じてきた際、ゴの結社長たちは一様に身を隠した。外敵からゴの土地を守る本来の役割ゆえに、多くの場合はセデーンが結社長の身代わりとしてフランス側に出頭した。以後の植民地期を通じ、かくしてセデーンは、特定の家系に継承される原住民首長職をさす名詞となった。フランスの権力を後ろ盾としたこの新たなセデーンはダン社会で前例のない富者と化す一方、移住伝承と土地の用益権に支えられた地元民権力の化身であるゴの權威は致命的に失墜した。それゆえ、村落における土地と労働力の収奪様式に決定的な変容をもたらした「新参者」たるフランス植民地権力こそ、先着原理がダン社会で真の権力

を糊塗するフィクションとして作用した史上初の事例になったといっていよい。ここで史上初というのは、むしろ同じフィクションの使用がダン社会にとってのさらなる新参者、イヴォワール共和国政府に引き継がれたためである。

1980年代末時点のダナネには、植民地化以前の意味でも植民地期の意味でも、もはやセデーンにあたる人物は姿を消していた。この単語は、ココア栽培の拡張に成功して富を築いたズアン＝ウニアン郡内でもごく少数の村人や、アビジャンで機関の公私を問わず要職に就く人物への美称として口にされるだけだった。なかでも村人にとり当世唯一無二のセデーンとは、ウフエ＝ボワニであった。国内の他の主要言語と平等になるよう毎週決まった曜日に国营テレビで放送されるダン語ニュース番組のキャスターは、私が聴き分けられるダナネ方言ではない、マン方言を用いていた。ただし、大統領関連のニュースで彼が頻繁に発音するセデーンという単語だけは、私にも聴きとれた。

共和国独立後という時期区分をさす表現として、ダン語には「シトウィヤンがやってきてから」( *citoyen ya nu bhë ε* )という副詞句がある。「市民がやってきてからというもの、フランス人は立ち去った。代わりにこんどは、県知事と郡知事がやってきた」。だが知事をさす名詞は、植民地行政官(コマンダン: *commandant*)に由来する「クマナ」(*kumana*)のままだった。何より知事は「白人」(*kwi*)だった。村人にとりクマナはつねに苦々しい存在であっただけに、他方で同じ彼らが国父ウフエ＝ボワニに向ける手放しの評価は、一種異様なきわだちをみせていた。彼らにとり国父とは、まずセデーンだった。「彼はどうしてセデーンなのですか」。「それは彼が富者だからだ」。「でも彼はなぜ富者なのですか」。村人自身が薄々気づいているコーヒー流通の詐術の種が、私の質問に返ってくることはなかった。答えはきまっていた「なぜならウフエは、人を呼び寄せてやまない土地の父、セデーンだからだ」。

国营テレビの語用に反し、村では「ウフエ＝ボワニはゴである」と語られることもあった。「ウフエ＝ボワニは、人が分かりあうためにいる」偉大な領袖だという趣旨に加え、村人の語りで「国父」と「セデーン」と「ゴ」がい

ずれも等号で結ばれるのは、ひとえに「人を呼び寄せる」という三者共通の能力に因るものだった。この国に呼び寄せられる人間とは、彼らダン族の村にくらすマリンケ移住民であり、ブルキナファソの独身青年であり、あるいはギニアから訪れるフルベ商人や、ダナネ市街に店を構えるモーリタニア人、レバノン人、イラン人をさしていた。そしてその末端には私がいた。本章冒頭のエピグラフにあるごとく、最晩年のウフエ＝ボワニは、バウレの祖先がかつて新参者に示した寛容に比べれば自分の寛容にも限りがあるという意味の挿話を口にしたことがある。「自ら出向いてまでよそ者を呼び寄せた」バウレ王権の古き寛容が模範になるとすれば、バウレ移入民権力を主軸としたイヴォワール政府が独立と同時にオートヴォルタ政府と締結した労働移動協定の過去も、それで正当化されるにちがいない。ダナネの村人は、おそらくこの過去を知らない。かかる二国間協定とは何らの交点も持たぬダン村落社会の先着原理にとり、国父の偉大さを語るうえでは「よそ者が土地に呼び寄せられる」事実だけで十分だからである。ウフエ＝ボワニの築いたこの国は、人が分かりあうための土地であり富者の土地である。だから人は自然と、この土地に呼び寄せられる。ダナネの村々の住民からみたゴでありセデーであるところの国父とは、つまるところ先着原理のモラルを他のだれよりも体现し、それゆえ他のだれよりも大きな成功を勝ちえた、いわば最強の地元民として表象されていたことになる。

おなじ先着原理のモラルから派生した国父の表象が、なぜササンドラ境界の兩岸ではかくも異なるのか。ドゾンらが物語るかぎりでの「イヴォワール市民社会」の背景を担った移住民が、ダナネ地方にはついに訪れなかったからであろうか。たとえその理由づけが誤りではないとしても、重要なのは、だからダン族は今なお市民社会以前の時を生きている、などという結論の導出がおよそ不可能であるばかりか、ダナネの農民も「プランテーション経済」の登場人物ならぬ堅実なコーヒー・ココア生産者として、この国固有の労働空間へと確実に投げ込まれてきた事実がもつ重みであろう。外来の文化要素を拒絶してきた先述のダナネの村々も、けっきょくはある時点からコーヒー・

ココア栽培とマリンケ移民の双方を受け入れてきた。そうして国父は讃えられた。だがその一方で、偉大な富者の国を生きるというのに送電線の一本さえ届こうとはしない村の日常に、人々が底知れぬ諦念を抱いてきたこともまた疑いえない。送電線が届かないということは、農業という村の営みに国父が献辞をたむける、あの正午の国営テレビ放送を当の村人は目にしないことを意味する。けだし国営テレビの空間とは、「イヴォワール市民社会」の内部に位置を占めた「真の市民」にのみ貢献する、そのかぎりでの公共空間なのであろう。

イヴォワール国民という集合的主体の同一性を支える想像力が、最終的にウフエ＝ボワニ個人の姿に収斂していくかのようなダナネの事例は、構図としてごく平凡に映る。ただしそれは、ベテ族の村ならば確認されるかもしれない対抗倫理の事例でもなければ、逆に個人支配の統治倫理が国内の辺境にまで透徹する事態の例証でもない。国庫管理のうえでウフエ＝ボワニがその維持につとめたりベラリズムないし寛容の国是とはひとまず無縁な村落のモラル、先着原理の規範を介し、結果としては寛容の国是に適うしかたで住民の想像力が水路づけられているこの事例を、暴かれるべき虚偽意識としての「イデオロギー」論に回収することはできない。さもなくば研究者は、システムの重層決定を探究するつもりでいながら、けっきょくは「記号論的に透明」なラジオ・トレイシュヴィルの世界に舞い戻ることになるだろう。国父ウフエ＝ボワニについてダナネ地方のダン語話者たちが織りなす倫理の語りは、その内容が個人支配の統治倫理といかに合致してみえようが、まずなにより、国民なる主体の同一性になどおそらくは向けられていないからである。

## おわりに

本章では、個人支配の再考というテーマにモラルの問題系を加味しながら、コートディヴォワール共和国初代国家元首ウフエ＝ボワニの事例を考察して



きた。ドゾンらが提示したプランテーション経済論を経由し、ダン村落社会におけるウフエ＝ボワニの表象までを概観した以上の記述がいまだ覚書にとどまるのは、個人支配をモラルの観点から再考する際に問われるべきいまひとつの論点が、今回の考察からあえて省かれているためである。

本章第3節で私は、ダン社会における先着原理のモラルにふれた。他者のモラルを記す作業とは、だが同時に、当の記述を通じて主体　ダン社会という集合的主体　を立ちあげるふるまいを意味する。モラルとは主体の同一性をめぐる想像力である以上、モラルの記述者もまた、モラルを実践する当事者と変わらぬ次元で主体の同一性を想像し、結果として外部から主体を立ち上げる。モラルの問題系とは、その意味で主体の問題系の別名であるといってもよい。ウフエ＝ボワニに関する研究者の記述もイヴォワール国民の語りも、各人が想像したかぎりでの主体構成を促す点では次元を異にしない。前者にひそむ任意の規範を以て後者が語るモラルの虚偽を「イデオロギー」として暴く代わりに、それゆえ後者をあえてそのままのかたちで受容する試みから、いかなる可能性とジレンマがもたらされるのか。本章第1節の議論は、その点に向けられていた。

くわえて私が第1節で指摘したのは、国家・社会（中間集団）・個人という3つのレベルにおける主体が共和政体の思考の枠内では相互に連鎖する点について研究者がしばしば無自覚であり、それゆえ自らの記述が自らの望むようなかたで主体を想像し立ち上げている現実への無自覚と相俟って、上記3主体が研究者の記述のうちで「記号論的に透明」に繋がれ、無意識のうちに横滑りを来す傾向がある点だった。

主体の連鎖という現象に光をあてるうえで、個人支配の再考、ことに個人支配者の統治倫理というテーマは特権的な位置をしめる。倫理はこのとき、個人（支配者）と国民（支配対象）双方の同一性へと、事実上同時に差向けられた主体構成の想像力にかかわるからである。その点今回の私は、第1節でそれこそが難題となる旨を述べつつ、個人支配の再考が国家の同一性そのものの再考に繋がるという側面のみを考察の課題とみなしてきた。本章全体の

記述からいまだ欠けているのは、したがって個人支配者の統治倫理というときの国家のモラルならぬ個人のモラル、支配者個人の主体構成に関する想像力の再考作業である。実際、国家・社会・個人の3主体は、研究者側の記述（研究者独自のモラル実践）という点でも相互に連鎖してきた。任意の政治規範に沿って国家を立ち上げたい者が「国民史：ナショナル・ヒストリー」を、あるいは社会的なものの主体性を立ち上げたい者が「社会史」を記すように、特定個人の主体性を立ち上げたい者はその個人の「伝記」執筆に向かう。これら3種の記述ジャンルをすべて広義の伝記と呼ぶならば、伝記の執筆作業とはつねにそれ自体で、主体の同一性を想像するモラルの実践となる。

本章第2節でふれたショヴォーとドゾンらのブランテーション経済論も、その意味ではひとつの伝記である。それは主体の連鎖性に助けられた「イヴォワール社会」と「ウフエ＝ボワニ」の同時的な伝記執筆の企てであり、さらにまた、彼らがそう想像したい「イヴォワール国民」の伝記も行間には潜んでいる。彼らはそうして、ウフエ＝ボワニと呼ばれる身体にイヴォワール社会の主体性を読み込み、書き込んだことになろう。だがモラルの問題系が要請するのは、部外者ならではの俯瞰的な視線が促す「真の彼」と「偽の彼」の腑分け作業ではない。いいかえれば、それは個人レベルの伝記についても、本章第1節でふれた思考上のアクロバットを研究者に求めずにはない。つまり、いかなるテキスト群の往来がどの時点から、ウフエ＝ボワニという主体を擬したテキストへと結晶したのかという反・伝記的な視座を捨てぬまま、かつ「(すでに自明の個人として構成された)ウフエ＝ボワニとは誰なのか」をめぐる、当事者（個人支配を現に生きた人々）の伝記執筆とモラルの実践をあえてそのまま受容する試みである。このとき特にポイントとなるのは、一連の伝記中で「彼はいつからウフエ＝ボワニになったのか」が記された箇所であろう。

たとえば上記の伝記執筆者、ドゾンとショヴォーはこう記す。「ウフエは選出され、自らの名声とSAAの地位を高める。ほどなくして彼はウフエ＝ボワニとなる。巷間の風聞はそれをすぐさま、彼の勝利の標章として理解した(ボ

= アニBo-Agnilはバウレ語で《アニ族を打ち負かした者》と訳せるからである)」  
( Chauveau & Dozon [ 1988: 742 ] )。

自ら伝記語りと化したウフエ = ボワニによれば、かつて彼はウフエ・ジャア ( Houphouët Djaa ) を名乗っていた。バウレのト占師の忠告で出生時の彼にあたえられた不可視の守護霊ジャアは、フランス制憲議会選挙に初めて立候補する1945年まで、彼の傍らでひそかに佇んでいた。ウフエ・ジャアが「国父ウフエ = ボワニ」となるのは、つまりドゾンらが上で記した挿話と同一時点でのことである ( Houphouët-Boigny [ 1994: 13-14, 22n1, 35, 37 ] )。

最後に、稀代のグリオから作家に転じたひとりの男は、グリオの歴史語りを想わせるしかたで上記代議員選挙の翌年、1946年の仏領スーダン・キタで自らが耳にした声を文字に写しとる。「私の父が教わったのは、あの行きずりの男がウフエ = ボワニという名であることだった。だが、誰もがその男のことを、フォフォイ ( Fofoi ) と呼んでいた」 ( Diabaté [ 1982: 37 ] )。

グリオが声を文字に写しとるとき、読者はそれを再度、自分の声に写し直してみる必要がある。丸めた唇を日本語の「フォ」よりやや突き出して緊張させ、同じくやや強めに息を吐くつもりで発声するとき、最終音節の《i》がわずかに《yé》へ変じたような感覚が発話者の耳には残されよう。60年前のキタで響いたはずのこの音、このモラルの伝え手 ( véhicule ) に乗ってキタの地を自在に往来したはずの想像力の内実こそ、伝記的知識から還流して語られるウフエ = ボワニではない一介の旅人フォフォイ、いや「フォフォイエ」なる男の同一性へと差し向けられたモラルとなる。数多の表象が交差するテクストの名は、まもなくフォフォイエでも、ましてやウフエ = ボ = アニでもウフエ・ジャアでもなく、集会的政治主体RDAの生誕とほぼ同時に、ウフエ = ボワニの名で連鎖的に生誕し定着していくだろう。モラルの問題系にとっての出発点はこの場合もまた、フォフォイエの残響を耳にとどめつつウフエ = ボワニの周囲に形成されてきた表象の堆積を研究者がそれとして受容する試みとなり、国家の統治倫理をめぐって私が本章で記してきた事柄を、個体形成のレベルでそのままたどりなおすことになるはずである。

〔注〕

- (1) 軍事クーデタによるコナン・ベディエ失脚の原因を、イヴォワリテの発揚に関する失脚者個人の発言と過剰なまでに繋げていたのがコナン・ベディエ自身でもあった事実は、たとえばフランス亡命直後の彼が綴った釈明文にも如実に表出する (Konan Bédié [2000])。イヴォワリテをめぐる大統領在任中の彼の発言については、Konan Bédié[1995: chap. 7, 1999: chap. 19], Touré éd.[1996]を参照。
- (2) ただし西アフリカ現代政治史について、村落住民の大規模な動員へと波及しないかぎり、体制変革をめざした都市部の社会運動も真の運動とはいえないと断ずる発想もまた、特定の社会変動観に拘束されている点については別稿でふれた (真島 [2004b, 2004c])。
- (3) ニジェールではラジオ＝バンブー (Radio-bambou)、マリではラジオ＝カンカン (Radio-cancan) と呼ばれ、セネガルでは風評の速さを強調した、ブッシュの電話 (Téléphone de brousse) の俗称もみられる (Equipe IFA [1988: 315-316, 364])。都市風聞の現象を本章の考察と繋げるうえで、私は研究会メンバーの落合雄彦氏から貴重な示唆をえた。
- (4) 村と都市の連続性という点で記憶に残る事例として、1996年11月のロベール・ゲイ (Robert Guéi) 解任事件に際し、私が親しくしているアビジャン近郊ベンジャヴィル (Bingerville) 市内のウォベ (Wobé) 族コミュニティの人々から教わった「事件の真相」がある。物語の舞台はやはり大統領官邸の一室で、当時のコナン・ベディエ大統領とゲイの確執にまみれた密室劇が語りの核心をなしていた。ダン語を母語とするゲイは国内西部ピアンクマ (Biankouma) の出身で、私の滞在地ダナネもウォベ族居住域も、すべて西部最大の都市マンをとりまく近接した地理関係にある (図2参照)。コナン・ベディエがいかにも狭量な男として描かれたこの風評について、「きみも西の人間なのに、この真実をまだ誰からも聞いてなかったのか」と、私は人々から訝しがられた。
- (5) 以下の佐藤の指摘における「アフリカ」を「旧第三世界」一般と読みかえれば、「記号論的な透明性」という表現が批判の矛先を向ける他者表象の内実も、より明瞭となる。「ジャクソンらの議論の要諦を編者なりに整理すれば、「十分に制度化されていないアフリカ国家においては秩序が『統治者』個人によって与えられている。いわば、国家は『個人化された制度』によって支えられている」という点にあるといえる」(佐藤 [2006b: 12])。旧第三世界批評理論サイドで指摘されたこの問題については、共和政体の翻訳論という観点から別稿で論じた (真島 [2005: 38-41])。
- (6) 1970～80年代にアビジャン大学アフリカ歴史・芸術・考古学研究所 (Institut d'histoire, d'art et d'archéologie africains: IHAAA) の歴史学者だったロラン・

バボにくわえ、キブレ (Pierre Kipré) やルクー (Jean-Noël Loucou) のように研究業績として第一級の水準を誇るイヴォワール人歴史学者、さらには同国公式ナショナル・ヒストリーの決定版としてウフエ = ボワニの序文と公印が付された『コートディヴォワール・メモリアル』全4巻 (Diabaté et al. [1987]) をキブレ、ルクーとともに執筆した歴史学者 (ジャバテ [Henriette Diabaté], シンブラ・エカンザ [Simon-Pierre M'Bra Ekanza], セミ = ビ [Semi-Bi Zan]) のほとんどが、遅くとも内戦勃発時点までにイヴォワール中央政界で各自の政治的党派性を明確にしていた事実 (Verdier [1996], Mpara [2002]) は、ある時期のイヴォワール歴史学界それ自体が同国政治史研究の考察対象になりうることを示唆するばかりか、国際的にも引用率の高い彼らの論考を引用する外部の研究者に対し、自らが拠って立つ当の「外部」なる場所の不確かさを照らした鏡像としても作用せずにはいない。

- (7) こうした思考の転回に到るうえで、コートディヴォワール研究の先学、原口武彦氏との20年近い研究交流を通じ、人類学徒としての自分がモラルの問題系にかかわる数多くの思考法と可能性を氏から学び得ていたことに、私は不覚にも最近まで気づかなかった。本文の記述に研究者の自己批判とおぼしきニュアンスが看取されるとすれば、それは多分に、鋭利なマルクス主義的感性とウフエ = ボワニへの距離感を欠く批評とがなぜ同一人物の内で共存しうるのか、その根拠に迫る努力をあえて拒んできた一研究者の自戒の念が、記述に影を落とすがゆえである (cf. 原口 [1969: 105, 1988: 102-109, 1992: 139-140] )。
- (8) 冒頭の「基本的背景」を除く本節以下の記述は、Chauveau [1987], Chauveau & Dozon [1985, 1988], Dozon [1997] による。ただし、「国内フロンティア」の表現は、Chauveau [2000] による。
- (9) 西アフリカ沿岸部の農業に関するフランス語文献では、アブラヤシやゴムも含め、輸出用一次産品を生みだす有用植物の大半が樹木であることから、食糧作物栽培 (cultures vivrières) との対比における輸出作物生産が「樹木栽培」(arboricultures) や「多年生 (植物) 栽培」(cultures perennes) と表現される。それゆえ「プランター」も、穀物の播種ではなく「植栽をする者」(planteur) という語の原義にニュアンスが近づくことになる。
- (10) 南東マンデはかつて「南マンデ」の名で知られていたが、別稿でふれたように、この名称は言語学的分類としての有効性をすでに失っている (真島 [1997: 5-9] )。
- (11) 辞書レベルではほぼ同義にあたる “alloène / allochtone” の特異な概念区分は、フランス植民地行政の語用に起源をたどる。センサス関連の植民地文書では、これらの語彙がしばしば “autochtone” と並び、独立の数値記入欄を与えられていた。
- (12) ドゾンらが指摘するように、プランテーション経済をふまえた歴史認識から

みれば、両大戦間期以降のさまざまな政治団体の結成に反映するパウレ系エリートと、アニ系またはベテ系エリートとの確執も、地元民権力と移住民権力の対立図式により理解可能となる。独立後わずか10年で生じてしまったアニ人のサンウィ分離独立闘争（1969年）や、ベテ人をめぐるガニョア虐殺事件（1970年）の解釈についても同様である。くわえて、内戦に到るこの10年間の同国の混迷がそれ自体きわめて不幸な政治過程でありながら、ドゾンらにとっては持論の説得力を著しく高める契機となった点是否定しがたい（Chauveau [2000], Dozon [2000]）。不幸にも現実の政治過程は、内戦勃発の20年前から彼らが労働力移動と土地所有をめぐるロング・デュレの見地から指摘してきた国民主体の問題性をそのままなぞるかのよう進行してしまった。ただ、すでにふれたように、そうした彼らの解釈が論理として帯びる明証性と、イヴォワール内戦の当事者がその明証性に対してさえ抱くかもしれぬ違和感や苛立ち（ex. Boa Thiémélé [2003: 163-187]）とが通約不可能であることはいうまでもない。

- (13) “Nana”は「祖父／首長／長老」を共示するパウレ語の名詞“nannan”に由来する。ウフエ＝ボワニへの愛称として1983年、当時のケイタ（Balla Keita）文相により提唱され、以後メディアを通じて国民に普及した（Toungara [1990: 41], Timyan et al. [2003: 320]）。
- (14) マリの文豪ハンパテ・バに生前のウフエ＝ボワニ自らが語ったという「兄弟とナイフ」の寓話は、鉄の規律と赦免の寛容とをあわせもつ個人支配者の統治倫理に、村の生活倫理と呼びうる要素が確かに内包されていることを暗示するものだった（真島 [2006b]）。
- (15) ギアツの統合革命論を発展させて「アフリカの市民社会」の姿を模索した社会学者エケ（Peter P. Ekeh）が、同時にデュルケムの社会連帯論をふまえた一見きわめて学理的な交換理論を発表したのは、彼の祖国ナイジェリアでピアフラ内戦が終結してわずか数年後のことだった（Ekeh [1974, 1975]）。モラルの問題系をめぐる西アフリカ政治研究史の一ページとして、この事実には容易に忘却しがたいところがある。
- (16) Zolberg [1964: 116] が引用する、当時のPDCI幹部エクラ（Vangah Mathieu Ekra）の証言（1959年）。この証言がもつ意義を、私はWoods [1994: 467] の記述から再認識した。
- (17) 私が以下でササンドラ境界の両側にそれぞれ想定する社会経済的特質にとり、つぎの2地域はつねに例外をなす。境界以東については、ほぼ森林＝サヴァンナ境界線上に位置する新興の小規模生産地セゲラ。境界以西については、独立以後の港湾開発事業により独自の発展経路をたどってきた沿岸都市ササンドラ。
- (18) 生産様式の節合論については、中間集団に関する別稿（真島 [2006a]）の執

筆時点で、共同寄稿者のひとりである佐藤章氏との議論から貴重な示唆を得た。

- (19) ゴの文化的意味、およびダン社会の先着原理に関する以下の概略については、それぞれ別稿（Majima [1997]、真島 [1991]）で詳述したことがある。

## 〔参考文献〕

### <日本語文献>

- アーレント、ハンナ [1969] 『イェルサレムのアイヒマン 悪の陳腐さについての考察』（久保和郎 訳）みすず書房。
- 伊豫谷登士翁 [2003] 「グローバリゼーション・スタディーズの課題」（小泉潤二・栗本英世編 『トランスナショナルリティ研究 場を越える流れ』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」2002・2003年度報告書第2巻 20-30ページ）。
- 川端正久 [2006] 「アフリカ国家論争を俯瞰する」（川端正久・落合雄彦編 『アフリカ国家を再考する』晃洋書房 1-81ページ）。
- グラムシ、アントニオ [1994a] 「マキャヴェッリと現代の君主」（『新編 現代の君主』上村忠男訳 青木書店 60-71ページ）。
- [1994b] 「『非政治的な』党形態について」（『新編 現代の君主』上村忠男訳 青木書店 237-243ページ）。
- 佐藤章 [2000] 「コートディヴォワール独立運動におけるアフリカ人農業組合（SAA）の役割 再検討の試み」（『アフリカ研究』第56号 53-66ページ）。
- [2001] 「コートディヴォワールにおける換金作物生産と一党制成立過程 PDCIの組織化戦略と『脱ブランター化』」（高根務編 『アフリカの政治経済変動と農村社会』アジア経済研究所 139-183ページ）。
- [2006a] 「統制的結社とイデオロギー コートディヴォワールにおける差別的排除の実践に関する考察」（『文化人類学』第71巻第1号 50-71ページ）。
- [2006b] 「『統治者』再考という問題意識と可能性 序に代えて」（佐藤章編 『アフリカの『個人支配』再考 共同研究会中間報告』アジア経済研究所 9-20ページ）。
- 周蕾（レイ・チョウ） [1999] 『プリミティヴへの情熱 中国・女性・映画』（本橋哲也・吉原ゆかり訳）青土社。
- 原口武彦 [1969] 「書評：S・アミン著『コート・ジボワールにおける資本主義発展』」（『アジア経済』第10巻第2号 2月 102-105ページ）。
- [1986] 「コート・ジボワール経済の奇跡的成長と危機」（『アジア経済』第27巻第5号 5月 25-44ページ）。
- [1988] 「コートジボワールのブルキナファソ人 西アフリカの国際労働移



- 動 」（『アジア経済』第29巻第7/8号 7-8月 90-110ページ）。
- [1992]「コートジボワールの国民意識形成と移民労働者」（百瀬宏・小倉充夫編『現代国家と移民労働者』有信堂 119-142ページ）。
- [1995]「構造調整とコートジボワール農業」（原口武彦編『構造調整とアフリカ農業』アジア経済研究所 171-194ページ）。
- 真島一郎 [1991]「秘密結社の語りにみる空間イメージ 象牙海岸、ダン族の場合」（『アフリカ研究』第38号 55-73ページ）。
- [1997]「西大西洋中央地域（CWA）とポロ結社の史的考察 シエラレオネ、リベリア、ギニア、コートディヴォワール」（『アジア・アフリカ言語文化研究』第53号 1-81ページ）。
- [1999]「植民地統治における差異化と個体化 仏領西アフリカ・象牙海岸植民地から」（栗本英世・井野瀬久美恵編『植民地経験 人類学と歴史学からのアプローチ』人文書院 97-145ページ）。
- [2000a]「仏領西アフリカの記憶 ダン語およびフランス語によるインタビュー記録」（平野克己編『アフリカ比較研究に向けて 諸学の挑戦』（調査研究報告書）アジア経済研究所 173-259ページ）。
- [2000b]「『真の国民』問う危うさ」（『朝日新聞』12月26日朝刊第6面）。
- [2004a]「六八年五月、ダカール 共和政体の翻訳論」（石井洋二郎・工藤庸子編『フランスとその 外部』東京大学出版会 71-101ページ）。
- [2004b]「しかし 神話 は殺せるだろうか ネグリチュードをめぐる蜂起と寛容」（エム・セゼール著『帰郷 ノート／植民地主義論』砂野幸稔訳 平凡社ライブラリー 324-350ページ）。
- [2004c]「アマドゥ・クルマと 六八年 反システム運動としての西アフリカ文学」（『アフリカ文学研究会会報 MWENGE』第33号 17-20ページ）。
- [2005]「翻訳論 喩の権利づけをめぐる」（真島一郎編『だれが世界を翻訳するのか アジア・アフリカの未来から』人文書院 9-57ページ）。
- [2006a]「中間集団論 社会的なものの起点から回帰へ」（『文化人類学』第71巻第1号 24-49ページ）。
- [2006b]「体の翻訳／徳の翻訳 ウフエ＝ボワニとグラムシの異なる舌から」（星埜守之・澤田直編『アウリオン叢書04 翻訳の地平 フランス編』白百合女子大学言語・文化研究センター 43-55ページ）。
- ロバーツ、マイケル [1993]「ナショナリスト研究における情動と人」（大杉高司訳）（『思想』第823号 127-150ページ）。

< 外国語文献 >

Amin, Samir [1967] *Le développement du capitalisme en Côte d'Ivoire*, Paris: Editions

de minuit.

- Amondji, Marcel [ 1986 ] *Côte d'Ivoire: Le P.D.C.I. et la vie politique de 1944 à 1985*, Paris: Editions L'Harmattan.
- Amselle, Jean-Loup[ 1985 ]"Ethnies et espaces: pour une anthropologie topologique," dans J.-L. Amselle & E. M'Bokoro éd., *Au cœur de l'ethnie: Ethnies, tribalisme et Etat en Afrique*, Paris: Editions la découverte, pp. 11-48.
- Bakary, Tessilimi [ 1984 ] "Elite Transformation and Political Succession," ( transl. by J. Savage ) in I.W. Zartman and C. Delgado eds., *The Political Economy of Ivory Coast*, New York: Praeger Publishers, pp. 21-55.
- Baudouhat, Dominique[ 1994 ]*200 citations du président Henri Konan Bédié*, Bouaké: Editions Baudouhat.
- Bayart, Jean-François [ 1996 ] *L'illusion identitaire*, Paris: Librairie Arthème Fayard.
- Blion, R., & S. Bredelou[ 1997 ]"La Côte-d'Ivoire dans les stratégies migratoires des Burkinabè et des Sénégalais," dans B. Contamin & H. Memel-Foté éd., *Le modèle ivoirien en questions: Crises, ajustements, recompositions*, Paris: Editions Karthala & Editions de l'ORSTOM, pp. 707-737.
- Boa Thiémélé, Ramsès L. [ 2003 ] *L'ivoirité entre culture et politique*, Paris: Editions L'Harmattan.
- Boni, Dian [ 1985 ] *L'Economie de plantation en Côte d'Ivoire forestière*, Abidjan: Les Nouvelles Editions Africaines.
- Bouche, Denise [ 1968 ] *Les villages de liberté en Afrique noire française 1887-1910*, Paris: Mouton & Co.
- Brooks, George E. [ 1993 ] *Landlords & Strangers: Ecology, Society, and Trade in Western Africa, 1000-1630*, Boulder: Westview Press.
- Chaffard, Georges[ 1965 ]"Quand Houphouët-Boigny était un rebelle," dans Georges Chaffard, *Les carnets secrets de la décolonisation*, Paris: Calmann-Lévy, pp.99-132.
- Chappell, David A. [ 1989 ] "The Nation as Frontier: Ethnicity and Clientelism in Ivorian History," *International Journal of African Historical Studies*, 22( 4 ), pp.671-696.
- Chauveau, Jean-Pierre [ 1987 ] "La part baule: Effectif de population et domination ethnique: une perspective historique," *Cahiers d'études africaines*, 105/106, pp. 123-165.
- [ 2000 ] "Question foncière et construction nationale en Côte d'Ivoire," *Politique africaine*, 78, pp.94-125.
- Chauveau, J.-P., & J.-P. Dozor[ 1985 ]"Colonisation, économie de plantation et société civile en Côte d'Ivoire," *Cahiers ORSTOM, Série Sciences humaines*, 21( 1 ),

- pp.63-80.
- [ 1988 ] "Ethnies et Etat en Côte-d'Ivoire," *Revue française de science politique*, 38( 5 ), pp.732-747.
- Chauveau, J.-P., J.-P. Dozon & J. Richard [ 1981 ] "Histoires de riz, histoires d'igname: Le cas de la moyenne Côte d'Ivoire," *Africa*, 51( 2 ), pp.621-658.
- Cohen, Michael A. [ 1973 ] "The Myth of the Expanding Centre: Politics in the Ivory Coast," *Journal of Modern African Studies*, 11( 2 ) pp.227-246.
- Contamin, B., & H. Memel-Foté éd. [ 1997 ] *Le modèle ivoirien en questions: Crises, ajustements, recompositions*, Paris: Editions Karthala & Editions de l'ORSTOM.
- Delafosse, Maurice [ 1904 ] *Vocabulaires comparatifs de plus de soixante langues ou dialectes parlés à la Côte d'Ivoire et dans les régions limitrophes*, Paris: Leroux.
- Diabaté, Henriette, et al. [ 1987 ] *Mémorial de la Côte-d'Ivoire*, 4 tomes, Abidjan: Edition Ami Abidjan.
- Diabaté, Massa Makan [ 1982 ] "Félix Houphouët-Boigny, homme de la terre," dans SAC éd. [ 1982 ] pp. 37-39.
- Dozon, Jean-Pierre [ 1985 ] "Les Bété: une création coloniale," dans J.-L. Amselle & E. M'Bokoro éd., *Au cœur de l'ethnie: Ethnies, tribalisme et Etat en Afrique*, Paris: Editions la découverte, pp. 49-85.
- [ 1997 ] "L'étranger et l'allochtone en Côte-d'Ivoire," dans B. Contamin & H. Memel-Foté éd., *Le modèle ivoirien en questions: Crises, ajustements, recompositions*, Paris: Editions Karthala & Editions de l'ORSTOM, pp. 779-798.
- [ 2000 ] "La Côte d'Ivoire entre démocratie, nationalisme et ethnonationalisme," *Politique africaine*, 78, pp.45-62.
- [ 2003 ] *Frères et sujets: La France et l'Afrique en perspective*, Paris: Editions Flammarion.
- Ekeh, Peter [ 1974 ] *Social Exchange Theory: The Two Traditions*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press ( ピーター・P・エケ 『社会的交換理論』 [ 小川浩一訳 ] 新泉社 1980年 )
- [ 1975 ] "Colonialism and the Two Publics in Africa: A Theoretical Statement," *Comparative Studies in Society and History*, 17, pp.91-112.
- Equipe IFA [ 1988 ] *Inventaire des particularités lexicales du français en Afrique noire (2e édition)*, Paris: EDICEF.
- Fauré, Y.-A., & J.-F. Médard éd. [ 1982 ] *Etat et bourgeoisie en Côte d'Ivoire*, Paris: Editions Karthala.
- Grah Mel, Frédéric [ 2003 ] *Félix Houphouët-Boigny: I - Le fulgurant destin d'une jeune*

- proie (?-1960)*, Abidjan: CERAP & Paris: Maisonneuve & Larose.
- Grah Mel, Frédéric, éd.[ 2005 ] *Rencontres avec Félix Houphouët-Boigny*, Abidjan: Frat Mat Editions.
- Houphouët-Boigny, Félix [ 1994 ] *Mes premiers combats: Confidences recueillies par Patrice Vautier*, Abidjan: Nouvelles Editions Ivoiriennes & Paris : Edition° 1.
- Konan Bédié, Henri [ 1995 ] *La Côte d'Ivoire: Une nouvelle société aux frontières nouvelles du développement*, Abidjan: Editions NETER.
- [ 1999 ] *Les chemins de ma vie*, Paris: Plon.
- [ 2000 ] "Voice ma part de vérité," *Le Monde*, 15 janvier, p. 18.
- Launay, Robert [ 1979 ] "Landlords, Hosts and Strangers among the Dyula," *Ethnology*, 18 ( 1 ), pp.71-83.
- Losch, Bruno [ 2000 ] "La Côte d'Ivoire en quête d'un nouveau projet national," *Politique africaine*, 78, pp.5-25.
- Loucou, Jean-Noël [ 1977 ] "Aux origines du parti démocratique de la Côte d'Ivoire," *Annales de l'Université d'Abidjan, série I (Histoire)*, 5, pp.81-99.
- Majima, Ichirō [ 1997 ] "Voix de masque sans visage: 'Maania' chez les Dan du Danané-Sud ( Côte d'Ivoire )" dans J. Kawada éd., *Cultures sonores d'Afrique*, Tokyo: ILCAA, pp. 237-307.
- Memel-Foté, Harris [ 1991 ] "Des ancêtres fondateurs aux Pères de la nation: Introduction à une anthropologie de la démocratie," *Cahiers d'études africaines*, 123, pp.263-285.
- [ 1999 ] "Un mythe politique des Akan en Côte-d'Ivoire: le sens de l'Etat," dans P. Valsecchi & F. Viti éd., *Mondes Akan: Identité et pouvoir en Afrique occidentale*, Paris: Editions L'Harmattan, pp. 21-42.
- Mpara, Victor [ 2002 ] *Côte d'Ivoire: les hommes de pouvoir*, Paris: Indigo Publications.
- MPCI ( Ministère du Plan, République de la Côte d'Ivoire ) [ 1966 ] *Etude Générale de la Région de Man (4): Etude sociologique et démographique*, Paris: Bureau pour le Développement de la Production Agricole.
- Mundt, Robert J. [ 1987 ] *Historical Dictionary of the Ivory Coast (Côte d'Ivoire)*, Metuchen, N.J. & London: Scarecrow Press.
- Proteau, Laurence [ 2002 ] *Passions scolaires en Côte d'Ivoire: Ecole, Etat et société*, Paris: Karthala.
- SAC ( Société Africaine de Culture ) éd[ 1982 ] *Hommage à Houphouët-Boigny: Homme de la terre*, Paris: Editions Présence Africaine.
- Schwartz, Alfred [ 1971 ] *Tradition et changements dans la société guéré (Côte d'Ivoire)*, Paris: Editions de l'ORSTOM.
- Suret-Canale, Jean [ 1994 ] *Les Groupes d'Etudes Communistes (G.E.C.) en Afrique*

- noire*, Paris: Editions L'Harmattan.
- Sylla, Lanciné [ 1985 ] "Genèse et fonctionnement de l'Etat clientéliste en Côte d'Ivoire," *Archives européennes de sociologie*, 28( 1 ) pp.29-57.
- Timyan, Judith, et al., éd. [ 2003 ] *Dictionnaire Baoulé-Français*, Abidjan: Nouvelles Editions Ivoiriennes.
- Toungara, Jeanne Maddox [ 1990 ] "The Apotheosis of Côte d'Ivoire's Nana Houphouët-Boigny," *Journal of Modern African Studies*, 28( 1 ) pp.23-54.
- Touré, Saliou, éd. [ 1996 ] *L'ivoirité: ou l'esprit du nouveau contrat social du président Henri Konan Bédié*, Abidjan: PUCI.
- Vennetier, P., et al. [ 1983 ] *Atlas de la Côte d'Ivoire*, (2e édition), Paris: Les Editions Jeune Afrique.
- Verdier, Isabelle [ 1996 ] *Côte d'Ivoire: 100 hommes de pouvoir*, Paris: Indigo Publications.
- Vidal, Claudine [ 1991 ] *Sociologie des passions: Rwanda, Côte d'Ivoire*, Paris: Editions Karthala.
- [ 2002 ] "Du conflit politique aux menaces entre voisins. Deux témoignages abidjanais," dans M. Le Pape & C. Vidal éd., *Côte d'Ivoire, L'année terrible 1999-2000*, (2ème édition augmentée d'une postface), Paris: Editions Karthala, pp. 215-252.
- Wallerstein, Immanuel [ 1997 ( 1988 ) ] "La construction des peuples: racisme, nationalisme, ethnicité," dans E. Balibar & I. Wallerstein, *Race, nation, classe: Les identités ambiguës*, Paris: Editions la découverte, pp. 95-116.
- Woods, Dwayne [ 1994 ] "Elites, Ethnicity, and 'Home Town' Association in the Côte d'Ivoire: An Historical Analysis of State-Society Links," *Africa*, 64( 4 ) pp.465-483.
- Zolberg, Aristide R. [ 1964 ] *One-Party Government in the Ivory Coast*, Princeton: Princeton University Press.

#### 映像資料

- Duparc, Henri [ 2004 ] *Laurent Gbagbo: La force d'un destin 1945-2000*, FOCAL13.